
狩れ！

深言都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩れ！

【Nコード】

N8817Q

【作者名】

深言都

【あらすじ】

それぞれ複雑な過去を持つ全身葬式色の3人組。

彼らは“ある条件”に当てはまる人間を永遠に探し続けていた。

人が生きる意味とは？

この世界の真実とは？

気が遠くなるほどの過去から

すでに始まっていた忌まわしい出来事。

バラバラにされたピースが
少しずつ繋がっていく。

謎がすべて解けたとき・・・

あなたは本当に「あなた」でいられますか・・・？

王子発見！（前書き）

そのあなた、閲覧注意ですよ・・・

王子発見！

街角に何の祭りかと思うほどにポップでカラフルな文字が書かれた看板が立てられている。

『この募金でおなかをすかせた　たくさんの子供たちが救われまーす』

看板にはトーストやおにぎりといった食べ物がこれまたかわいらしいイラストで描かれており見るからに手描き品質であることを物語っていた。

「募金お願いしまーす」

「恵まれない子供に愛の手をー」

その横に並んで立っているセーラー服の五人組は、それぞれのメッセージが書かれた募金箱をひとつずつ抱えていた。

この日は朝からの身の凍るような風が止まず、少女たちの赤い鼻と耳は情に訴えるには最適なアイテムとなっていた。

一人の男が財布を出しながら近付いていく。数分前までスカートからのぞく鳥肌の立った足をニヤついた顔で眺めていた男だ。

「おじょうちゃんたち偉いねえ。君たちのかわいさに、おじさん募金しちゃうつ」

酔っぱらいのようなセリフと共に五人の箱に平等な額を入れる。

「わあっ、ありがとうございますっ！」

「ありがとうございます！」

「ご協力感謝します」

間近でセーラー服を堪能した男はニヤついた顔をさらに緩ませながら名残惜しそうに去っていった。

「募金ご協力お願いしまーす！」

「あなたの優しさで誰かの命を救うことができるんでーす！」

「どうか……！」

「ねえ、君たち……」

少し低く透き通った声が少女たちの言葉を遮った。

そろって振り返ると看板の前に、かなり高そうなスーツで身を包んだ凛々しい青年が満点の微笑みを浮かべて立っている。

五人とも反射的に赤面で絶句してしまった。

青年がまた口を開く。

「ねえ、一体いくらあればその命ってやつを救えるのかな？」

想定外の質問だったが瞬時に対応できる子というのはどこにでもいるものである。三つ編みの子が口を開いた。

「いくらでもいいんです。十円でも一円でも。募金はその人の気持ちですから」

その答えに青年は眉をしかめ眼鏡の位置を直した。

「それはまたおかしな話だね……まあいい。今は持ち合わせがこれしかないからと。まさかカードをもらっても困るだろうからね」

微笑みを浮かべたまま出した金額は……もちろん折り畳んでも募金箱に入るわけはなく中学生にとっては人生初とも言える札束の重みだった。受け取った少女はあまりのことに固まってしまい、ほかのメンバーもどうしてよいのかわからず挙動不審になっている。

「で、でもっ！ ダメです！ こんな大きなお金は受け取れな……」

先生に言われたことを思い出した生徒の震える唇は青年の人差し指により封じられてしまった。

「いいんだよ。誰かの命が救えるんだろ？ そのために君たちはここに立っているんだろ？ 違うのかい？ わかったら今日はもう冷えるからそれを持って帰りなさい。それじゃ」

少女漫画から抜け出てきたような恥ずかしい青年は言い終わるなりさつさと歩いて人ごみに消えた。その後ろをたくましい二人組が足早に追いかけていく。

「うそでしょ……」

信じられない量の札束に少女たちは腰を抜かしてしまった。

一人の子が携帯を取り出す。

「せんせー、今すぐ迎えに……いやあの……そうじゃなくて、とに

かく今すぐ……お願いだから……」

まだ人生経験の少ない五人の少女は寒さも忘れて、ただお互いの顔と札束を見比べることしかできなかった。

同時刻、風が吹きすさぶ鉄塔の上。白と黒の服をまとった三人組が遥か下に広がる景色を見つめていた。

よく冷えた骨組みに座っている一人は空に投げ出した足を楽しそうに揺らしている。首に巻かれた白いスカーフがこれでもかと言わんばかりになびき、肩で留められた膝までの真っ黒なマントは必然的にお尻の下に敷かれていた。

「ひょー、またひとり見つけたよーん。楽勝じゃーん。今度は誰が行く？ 優男って感じだからシーナが行きたいんじゃない？ 言わなくてもわかると思うけど俺様は却下ー」

そのすぐ横に立っていたシーナは、すかさず反論する。

「私だって嫌よ。あんなの好みじゃないもん。男なら何でもいいってわけじゃな・い・のっ！」

シーナは容赦なく吹き付ける風のせいで滅茶苦茶になっているゆるいウェーブの髪をおさえながら口を尖らせた。

その後ろで頬笑みながら二人のやり取りを聞いていた一人が顔を赤らめながら口を開いた。

「ちよっとちよっと二人とも、レインさんアレもののすごく好み……どストライク。っていうか何か運命的な物感じるよ！ 彼にはレインさんが行くから！ それじゃ！」

言うが早いか長身を翻して一直線に地上へ突っ込んで行った。残された二人が見送る中、三人の中で一番長い髪とコートをはためかせ見る間に街の影に溶け込んでいく。

座ったままのジャックが鼻で笑った。

「なんだよー。やっぱりレインが行くんじゃーん。ほんとと好きなんだな。あ・あ・い・う・の」

ジャックはレインが見えなくなっただのを確認してから口を開いた

が本人の耳に届いていることは承知の上だった。

その横で、つま先を浮かせてバランスをとりながら立っていたシーナがゆっくりと腰を下ろし膝を抱える。

「レインだって十二分に美形だっていうのにねー。私あのギャップには何千年経っても慣れない気がするわー」

「ああ、ほんつと言ってる」

ジャックはそう答えてから、次の獲物を探すため目を右に左に忙しく動かした。

まだ日が高い時間だが空は重く暗い雲が太陽を完全に隠してしまっている。人が登るにはあまりに高すぎるこの場所では刺さるような風は地上より強い。おまけにその風の中にちらほらと白いものが混じり出した。

「ちよつとやーだーコートが濡れちゃうー。地面もドロドロで靴が汚れちゃうし、私もう帰ろっかな。私、帰ってシュークリーム食べるからは全部ジャックが行って。じゃーあねー……」

飛び降りようと身を乗り出したシーナのコートが即座に驚掴みにされた。

「その冗談笑えないって感じじゃね？ 今日のノルマどれだけ残ってるかわかって言ってるわーけー？」

眉間にしわを寄せているジャックの引きつった笑顔。

「えへっ。ほんの二十五人、だよっ！」

シーナは最近漫画で覚えたリアクションを早速試すべく舌を出しながら両手の人差し指をほつぺたに当てて首を傾けた。

「なーにが、えへっ、だ。ふざけんじゃねーっての。今どきそんなんやってるやついねーぞ。お茶目に言っただって騙されねーからな！

俺様一人でそんなに……」

「あれー？ 男は今ので何でも言うこと聞くはずなのに……」って、だーいじょうぶ。レインがさっきの片付けたらずぐに戻ってくるでしょー？」

それを聞いて明らかにシーナをバカにした顔でため息をつく。

「あのなー、すぐ戻ってくるわけないだろ。レインが、どストライクって言ったんだぜー？　っていうか下手すりゃ今日はこのまま戻ってこないって。だから単純に計算しても俺様とシーナで十二人以上ってことになんだよっ！」

「ジャックのケーチー。わかったわよ。さっさと終わらせて帰りましょ。ほら、そうと決まったらさっさと探して」

ジャックがシーナを睨みつけた。

「俺の目にばっか頼ってねーでシーナも探す努力しろっつーの！」
「はいはい」

シーナは軽いジャンプでジャックの背中側の鉄骨に飛び移った。風上を向くことになっておでこが全開になってしまっている。いつもなら気にするところだがよっぽど早く帰りたいのか黙って瞳を見開いた。

相変わらず座ったままのジャックも“三人の中で一番、目がいい”ということを上返すことがないようにギラギラと目を動かした。

社長と酒豪！（前書き）

そんな毎日を送りたい？あなた、**厳重注意**ですね！

社長と酒豪！

一体どれだけの資金を注ぎ込んで建てたのか考えたくもないデザインのビルが違和感を主張しながら街にそびえ立っている。その最上階に、こういった建築物がとても似合う人物がいた。

そのオフィスで一際目立つデスクは輸入物のガラス製。チェアーは本革仕様で体に合わせて作られたカスタムメイドだ。人の高さほどもある観葉植物がやたらに置かれているのは気が利くと噂される秘書からの助言の結果だった。空調は完璧で、除湿と加湿の具合も馬鹿みたいに細かく設定されていた。

この部屋の主でありこのビル、つまりこの会社の持ち主でもある恥ずかしい青年はデスクに両肘をつき、そのまま両手であごを支える形で上等なチェアーに浅く座っていた。

「見たかい？ さっきのレディーたちの顔！ ポカーンとしちゃつてさー、あの程度の金額であんな顔するなんてかーわいいじゃないの」

ドアの両端にいた仁王立ちの二人は、いかつい顔のままそれぞれ黙ってうなずいた。アメリカ帰りの元軍人で仕事の腕は確かだ、と評判だが愛想は皆無の二人組だった。

青年はいつも通りのボディーガードの反応が気に入らなかったと見えてため息と共に勢いよく背もたれに寄りかかった。軋んだチェアーが革独特の鳴き声を立てる。

「本当につまらないね君たちって。僕は、いつもさあ……」

その言葉を遮って軽いノックが三回。

こんなキツツキのような速さで打つのはひとりしかない。青年は不服そうにあごを突き出しながらもノックの主を招き入れた。

秘書は部屋に入ってくるなり息つきも忘れているかのような速さで話し出した。

「社長、庶民とのふれあいはいかがでしたか？ またひとつ心が豊

かになられたのでは？ では早速ですがバーリシヤスが結局あの島を買ってしまったそうで島の人間は大ブーイングだとか。とはいえどんな形であれ話題を持つていかれてしまうのは必至。早急に対策を練るべきかと。それから人事の山田はやはり新人の書類の件をもみ消していたようで内部告発がありました。と言っても告発者がその原因を作った黒幕の佐藤だったというのが笑えますが。いえ笑えませんね。社長ちゃんと耳に入ってらっしゃいます？ それなら結構。今夜は夕食会があるのを忘れてはいませんか？ 前回のようにつづばかされては困りますよ？ ああ、社長がお留守の間に……

若社長は話の途中でチェアを回転させて秘書に背を向けた。デスクの後ろは窓なので必然的に外と面する形になる。上から下までガラス張りの窓際は自分が宙に浮いているかの錯覚を起こしそうなほどに無色透明だ。高所恐怖症なら泡を吹いて倒れるに十分な出来だった。

人の顔を見て話を聞かないのが普通という社長なので秘書も気にせず話し続けている。顔が見えなくてもちゃんと聞いていることを前提にしているのだ。だが残念なことに背を向けた時点で、いつものように心ここにあらず状態になっている若社長の耳には何も届いていなかった。

何の苦勞もなく当たり前のように親から継いだだけの会社には思い入れがあるはずもなく、ただ自由に使える金がいくらでもあるということだけが社長に就任したことへの特権、喜びのようになっていた。そんな風なので当然仕事らしい仕事ができるわけはなく文字通り名ばかりの社長と言っても過言ではない存在だった。本人も陰で自分が何と呼ばれているか、もちろん知っていたがそれを全く気にする様子はなかった。

ぼーっと外の世界を眺めながら、ただ秘書の話が早く終わることだけを考えていたバカ社長の目に、いきなり世にも恐ろしい光景が飛び込んできた。

「えっ……？　嘘……」

青年は真っ青になり思わず鳥肌を立てて飛び上がった。

真っ黒いカラスのような人間がビルの外、ガラスの画面上から降ってきたのだ。しかも落ちていくそのほんの一瞬の間に目を合わせるといふ妙技をやったのけ、余計に恐怖心をあおられた青年はパニックに陥ってしまった。

「うわあーっ！　飛び、飛び飛び飛び、飛び降りだあー！　早くっ！　お前たち、誰かつ！　下にっ」

この二次元から飛び出してきたような言動ばかりの青年がおかしなことを言い出すのはこれが初めてではないが、さすがに自分の会社のビルから飛び降りと言われれば黙っているわけにはいかない。飛び降りを見たのは若社長一人だったが、秘書は確認のために慌てて部屋を飛び出して行った。もちろんボディーガードの二人はその場から動かない。

そのとき

ドカーン！　という効果音がつきそうな勢いで、いきなりいい造りのドアが開け放たれた。

「はー！　あーい！」

それと同時に語尾の上がった甘い声で登場したのは飛び降りの犯人レインだった。

たった今地面に落ちたばかりでここは最上階。おまけに秘書とほぼ入れ替わりでここにいるというあまりに不自然な速さ。

出会い方にこだわりを持つレインは、わざわざ初顔合わせにインパクトを求めてしまったようだ。

ボディーガードが侵入者に反応するよりも速くレインが何かをつぶやく。すると二人は頬笑み、急に何事もなかったかのようにスタスタと部屋から出て行ってしまった。

「ご苦労だったねー。ムキムキのにわとりさんたちー」

その背中に笑顔で手を振るレイン。

そして自分の馬鹿力でも壊れることなく生き残った丈夫なドアを

手早く閉めて振り返った。

「さーてーとー」

つぶやきながら視界から消えたお目当てに向かってさっさと歩き出す。

青い顔の若社長はこのレイン登場シーンで腰を抜かしてしまいデスクの陰にへたり込んでいたのだ。

「おやおやおや、ずいぶんと情けないじゃないの。でもレインさん、君のそういうところも嫌いじゃないよっ」

そう言っただけで若社長を床からはがしてチェアに座らせ自分はデスクに腰を掛けて長い足を組んだ。そしてふりふり足首を揺らしながら、未だ口が塞がらない若社長のオフィスをぐるりと見回す。「さてと、一言も発してくれないのでレインさんから話しちゃうけど……ずいぶんというオフィスじゃないの。君の趣味？ ……って感じじゃないね。だって壁にかかっている落書きなんてド素人が描いたレプリカだし、グリーンもデカ過ぎでさらに置き過ぎ。まるでジヤングルだよ。ガラスをふんだんに使うのはいいけどこの照明のおかげで変なお店みたいになっちゃってるし、これ世界時計のつもり？ 時間ズレてるじゃないの。電波時計信用し過ぎ。これじゃただのインテリアだわ。あーあ、君に相応しいと思えるものがひとつもないだなんて、レインさんこの部屋にばかりテイストしか感じないよ」

返事がないのをいいことに一気にしゃべりきった。

若社長は黙ったままでレインをじろじろと観察し始めた。

高い位置でひとつに結んでいるがそれでも背中まで届くストレートの黒髪。そうそういないであろう二メートル近い身長、そして上から足首まで真っ黒くめ、という見るからに近付きたくない雰囲気。靴はつるつるでピッカピカの真っ白。

すべてが高級に見えるがブランドに詳しいはずの目を持ってしても、どの物かは判別できなかった。

若社長は何から聞けばいいのかがさっぱりわからず混乱し、ボデ

イーガードがいなくなったことにさえまだ気付いていなかった。結局だいぶ経って、やっと口から出たのは

「その絵は億の単位で買ったんだぞ……」

という悲しい一言だけだった。

レインはまるで自分の部屋のような振る舞いで、隠されていた五〇万のブランドーを見つけ出し許可も取らずにさっさと開けた。それをジュースのように惜しみなく二つのグラスに注ぎ分けて、青いままの青年にわずかに少ないほうを手渡す。

青年はボーツとしながらも反射的に手にしたものを口に運んでいく。

「さてさて、あんまりいじめちゃレインさん興奮しちゃうからそろそろ本題に入ろうかな。はい、質問です。『なぜあなたは募金をしたのですか？』」

昼間から酒が入って少しいい気分になった青年はレインがあの高さから落ちてなぜ平気なのか、ということや厳重な警備をどうやって突破してここまでできたのか、などということをきれいさっぱりどこかに消し飛ばしてしまった。

「あー、なんだ君も見てたのかい？ あんなのほーんの端金だよ」レインは涼しい顔でブランドーを飲み干してまたダバダバと信じられない量を注ぎながら流し目を送った。

「ぶー。それじゃ不合格です。サイチイン トウヤ君……ああ、『塔哉』か。君はとてもいい名前をもらえたんだね」

「え？ 何で名前……ああ、一応僕も一流企業のトップだからね。君みたいな一般人が僕の名前を知っているくらい当然ってことかな」どう見ても一般人には見えないレインは少し考えてからデスクの端を指さした。

つやのあるプレートに『彩内院 塔哉』と金色の文字。さらにその下には小さなアルファベットでSAITAIN TOUYAと書かれていた。

彩内院の顔が引きつる。

「あ、ああ。もちろんそうだよ。書いてあるもんね。……って、おいっ！ 何勝手に飲んでるんだよ！ これは世界に五十五本しかない高級……」

レインが登場してから実に一時間が経過していたが、やっと正気に戻った彩内院は自分の手にあるグラスと口に残る深いブドウの風味に気付き言葉を失った。

「まあまあいいじゃないの。それに、もしかしたら今日が人生最高の記念日になるかもしれないし。あ、お兄さんはね、知ってるかもしれないけどレインって言うの。よろしくね！。レイン兄さまって呼んでもいいんだよ」

自分でつけた名前をかなり気に入っているレインは、名前を決めた時から自分をレインさんと呼ぶようになっていた。

彩内院はグラスを空にしてから露骨に嫌な顔をしてみせた。

「誰が呼ぶか。それより何なんだ。ボディガードはどうした。お前は誰だ。何しにきた」

サラ艶の髪を揺らしてレインが頬笑んだ。

「おや欲張りさんだね。レインさんは君と二人っきりになりたかったから彼らには席を外してもらったよ。そして『私はもしかしたら未来のあなたかもしれない』まあ合格すれば全部わかる。ということ、もう一度聞くよ？ 『なぜあなたは募金をしたのですか？』」

「何が何だかさっぱりわかんないな。ああ……なるほどね。会社の金を無駄使いたったことを諫めたいんだね。君はうちの誰かとグルになつて僕をからかっているんだろう？ そうだよな。そうでなければ忍者のようなまねができるわけがないからね」

黙って聞いていたレインはとうとうブランデーのボトルを空にしまった。最後の一滴まで絞り出すために宝石細工と見紛うほど上等なボトルをぶんぶん振っている。

「あー、つと言いたいことはそれだけかな？ レインさんの時間は君のためにあけてあるから言いたいこととあるなら好きなだけどう

ぞ。レインさんのエネルギー源もたくさんあることだし。ちなみに君が思っていることは今のところすべてハズレだよ」

そしてグラスに口を付けながら次の飲み物を物色しに行った。

「ちよっ、おい！ 水じゃないんだぞ。大体なんで隠してあったと思ってるんだ。君みたいなのから守るためだよ！ あああ！ バカ！ それは……」

彩内院が慌てて立ち上がる。

いくら飲んでも酔うなどということがないレインにとっては五〇〇万のブランデーだろうが何だろうがジューズ代わりに過ぎないのだ。とはいえレインはアルコール以外のものは口にしなかったが。

現時点で世界最古の物と言われていたコニヤックがレイン兄さまの鮮やかな手つきにより瞬時に封印を解かれていく。そして数秒後には何の迷いもない動きによってほぼ垂直にグラスの上で逆立ちをしていた。

「くそっ！ あーもう！ この野郎！ くっそー！ もう！ 開けたんなら俺にもよこせ！」

もはや一人称さえこの有様だ。

レインが嬉しそうにボトルを傾ける。

「そうこなくっちゃ。さてと埒明かないんでそろそろ答えてね。そうじゃなきゃレインさん無駄足になっちゃうよ。まあ、おいしい思いはしてるけど……じゃあ、もう一度『なぜあなたは募金をしたのですか？』」

これに答えなければ話が進まないのだといいかげんわかり始めていた彩内院はアルコールが入った頭で、ゆるゆると考え始めた。（なぜって……理由？ どうして？ さっきの答えじゃ不合格。そもそも合格って何なんだ？ ああー）

数時間前の街の光景を思い返す。道行く庶民たち、秘書のせいで自分の足で歩かなければいけない時間、看板の文字、少女たちの言葉……言葉。頭に蘇る言葉と自分の行動を重ね彩内院は口を開いた。「あの子たちが金で誰かを……人の命を……助けられるって言うか

ら

レインの闇のような瞳がキラツと光った。

「ふーん。つまり募金をしたのは人の命を助けたいからだ、と？」

「そう。僕のおかげで誰かの命が救える。だから募金をした」

「もう一度確認するよ。君は君の力で誰かを救いたいというんだね？ それを望むと？」

彩内院がすつきりした顔で身を乗り出した。

「ああ。ああそくだよ。金ならいくらでもあるからね。世の中には僕みたいな男が助けてあげないと生きていけない不幸せな人間がいるんだろう？ 持ち合わせがあればいくらでも募金するよ。それが金が有り余ってるものの務めつてもんだろう？」

一瞬、彩内院から顔をそらしたレインが満足そうにニヤつき、すぐにまた顔を戻すと両手を広げながら振り返った。

「おめでとう！ 見事合格です！ もうレインさん感激しちゃったー！ じゃあ『あなたの望み通り、あなたで人を助けましょう』」

合格という言葉に彩内院は意味もわからず喜んで、またグラスを空にした。

困惑少年！（前書き）

自分のペースって大事です。あなた、速度注意ですよ！

困惑少年！

「じゃあ、もっかい聞くぜー？」なぜあなたは寄付をしたのですか？」

ジャックは絵本の世界に出てきそうな家の中でピンクのソファーにしゃがんでいた。落ち着いて座るには無理のある空間だったのだ。その向かいにはリボン付きの小型犬レディ・フランソワを膝に乗せ紅茶のカップを口に運ぶ小柄な女性。顔に刻まれたしわは高級エステに通つてもすべて隠しきれるものではないらしい。

「そうねえ。お金つてたくさん持つてもあの世まで持って行けないし、それを人のために使うのって素敵よね。それに、これが今の私にできる精一杯のことだったから……」

ジャックが苦笑いで頭をかいた。

「それが答え？ あー、惜しいんだけどなー。不合格だよおばちゃん。それって俺様的には完全に合格レベルなんだけど、それじゃちよっち違っちゃうわけー」

ジャックは「さえ子さん」と呼ぶように何度も注意されていたが、人の名前などどうでもいいので結局一度もその名前を口にしていなかった。

ひらつとソファーから飛び降りてマントとスカーフを整える。

「んじゃ、ま、縁がなかったってことで俺様帰るわ。お茶ごちそうさん」

一応口を付けるまねだけしたアール 그레이の礼を言う。

「え？ ちよつ、ちよつと待って！ それじゃどうすれば合格できるの？」

さえ子は、おばちゃんと呼ばれたことも忘れてフリルの膝掛けを落としながら立ち上がった。膝掛けと同じ扱いを受けたレディ・フランソワが驚いて部屋を出て行ったことにも気付いていないようだ。

ジャックは雲行きが怪しくなってきたことを感じ不安になってきた。ほかの二人に比べるとまだ経験が浅いのだ。

「あー、えっとー、そういうんじゃないかって合格しなくても何の問題もないし、もっと軽い気持ちでいてくれないと俺様も困っちゃうっていうかー……あー、ほらレディ・フランスーがどっか行っちゃったよ？」

名前を聞いた時に心の中で吹き出しただけのことはあり、やっぱりちゃんと覚えていなかったようだ。

大事な子供の名前を間違えられたことさえどうでもいいらしく、さえ子は拳を握りしめて身を乗り出している。

「そんなことより、不合格なんて嫌よ！ テストだろうと何だろうと不合格なんて許されないのよ！ 寄付だってこの私の力で下々のものたちに恩を売ってたからに決まってるじゃないの！」

ハツと口をつぐんだが時すでに遅し。

ニンマリ笑うジャック。困惑の顔が一瞬で小悪魔に変身した。

「やった！ 俺様が欲しかったのはそれだよそれー！ 合格だっ！

そんじゃ『あなたの望み通り、あなたで人を助けましょう』って

ね。そんじゃ俺様次があるから大急ぎで説明すんぜ？ いいか？

この……」

ヲタ優位！前！（前書き）

！
そりゃあ、好きなものには目がないので。あなた、物欲注意ですよ

ヲタ優位！前！

シーナは地面に降り立つなり本屋の誘惑と戦っていた。（あー！漫画あー読みたあーい！ここは立ち読みできるー！しかも今日『ベルリンず』発売日じゃないのー！でもー……そうだった！読んだあと三倍速で行けばいいよね！うん！そうしよう！）
「えへっ」

本屋の前で独り百面相をしてから心を決めたシーナは真っ直ぐに新刊コーナーへ足を向ける。途中で漫画なんか読んでんじゃねーぞ、というジャックの言葉など最初から聞く気はなかった。

「あつたー！これこれー」

嬉しさのあまり思わず口に出しながら最新四十一巻を手に取り早速読み始めた。読みながら時々体が変な風に動いているのは新しい仕草を会得しようとしているからだろ。記憶ゼロからスタートしたシーナにとって漫画の世界は斬新極まりないことだらけなのだ。

そのため、こういうことには余念がなく実行に移すたびジャックにバカにされていた。

「あつ！これもいいなあ。この動きかーわいーいー」

熱中している時の癖で小声どころか普通に声が出てしまっている。周りにいる人がビクツと驚いたり、くすくす笑ったりしているが当然シーナはおかまいなしだ。それどころが手首を返して握った拳をあごにつけ上目遣いの練習まで始めてしまった。要するにジャックだったら一目見ただけで吐き気を訴えそうな種類の漫画ということだ。

シーナは近くで見ると黒い目と髪に白が混ざっているためどちらとも不思議な色をしている。特に目は濁った灰色に見えるせいか全盲と勘違いをする人もいて、杖を持っていないシーナの手を握って歩いて行こうとした人もいたほどだ。シーナはそれと気付かず嬉しそうに手をつなごうとしたが気付いたレインに阻止されて、そのあと

説教となぜそういうことをされたのかの説明を受けることとなった。シーナが立っているすぐ隣には専門書のコーナーがある。そこにひとりの男が店員に案内され歩いてきた。

「医学書のコーナーはこちらになりますー。また何かありましたらお気軽にどうぞー」

男は軽く頭を下げながら棚を指と目で追い始めた。(つたくめんどくせーなー。こんなもん看護婦に買ってこさせりやいいのによ)舌打ちをしながら手元のメモと照らし合わせている。

「……んー？」

漫画に熱中していたシーナがオーラを感じて動きを止めた。と言っても目だけは漫画を読み進めている。そのまま読み続けたい気持ちとオーラの持ち主を確認しなければいけないという使命感の戦い……一〇秒という長い葛藤の末、使命感が敗北した。しかしシーナは自分の役目を忘れたわけではない。漫画から一瞬も目を離すことなくきちんと言っべきことだけは口にした。

「もしもし、そこのお医者さん本を見てる人。私がこれを読み終わるまでちゃんと待っててくださいね。私はあなたに大事な質問があるのです」

「！」

男は急いで周りを見回すが医療関係の本を見ているのは自分だけだということを再確認できただけだ。

「はあ？」

シーナの周りには男ばかり。声と距離からしてシーナがしゃべった張本人だというのは一目瞭然だった。漫画から目を離さないままのシーナの顔を見た男は遠慮がちに声をかけた。

「あー、あのさ、どっかで会ったっけ？」

「んーん。ないよ。でももう少しで読み終わるから大丈夫」

男は、大人っぽい服装の割に幼い感じを受けるシーナにどこまで本気で相手をしていいのかわからず困惑の表情を浮かべた。

「まさかナンパのつもりかい？ お嬢ちゃん」

そのセリフにさすがのシーナも顔を上げた。

「ちよつとー。さすがの私でも笑えないよ、それ。おじさん漫画の見過ぎじゃないの？」

ジャックとレインが聞いていたら大爆笑していただろう。

「なっ……とにかく俺は暇じゃないんでね。遊びたいなら他の人と遊べばいい。それじゃ」

自分がモテるということを否定された気がした男は眉をしかめて目当ての本を掴むとレジに向かって歩き出した。

ヲタ優位！中の上！（前書き）

そんなことばかり言われては困ります。あなた、唾液注意ですよ！

ヲタ優位！中の上！

「もう。あと少しだって言ってるのに……」

漫画を読むスピードが倍速になった。この状況でも読むのを止めないあたりはさすがシーナというところだ。ちゃんとあとがきまで流し読みだが目を通し、やっと漫画を手放した。

シーナは、たった今覚えたばかりの仕草を頭の中で復習しながら急いで店を飛び出していく。街に出て目を見開き自分に見える範囲を隅から隅まで見回す。

「ええーつとー……」

“捜し物”をするシーナの目を見た、通りすがりの子供が火がついたように泣き出した。何を見たのか気付いた親が慌てて子供をシーナから遠ざけている。集中しているシーナは泣き声がうるさいと思いつつもそれが自分のせいだとは思っていなかった。たとえばそうだと知っても特に何をするでもなかっただろうが。

「おーつと、見つけたびょん！」

シーナは覚えたばかりの言葉を早速実戦で使えたことが嬉しかったらしく、うふうふ笑いながら人ごみに見え隠れする男の頭を指して軽いフットワークで走り出した。

その姿を確認してからほんの数秒で男に追いつき後ろから思いつきりスーツを引っばる。

「うわっ！」

男はさすがに倒れはしなかったが妙な衝撃にバランスを崩し膝をカクンッと折りまげて何が起こったのかわからないままに歩くのを中断した。

「お待たせしました、ご主人様ー！」

シーナの言葉に周りの人ごみがザッと男から距離をとる。当然男は慌てふためいてしどろもどろになってしまった。

「んなっ！　ちょ、いやいや何言ってるんだ君は！　そっ、そんな

違います！ 違う、知らない、誤解ですよ、この子は全く知らない子で……」

「ご主人様ヒドイでちゅー。今日は、あたちをいじめる日でちたかー？ いつもみたいに優しくしてくれなくちゃー……い・や・で・ちゅっ！」

シーナは本気で男をおもちゃにしているようだ。漫画の影響は恐ろしいものである。

男は顔面総赤になり、目を泳がせながらこの寒さの中ダラダラと汗をかいている。せつかく買った本も落としてしまった。

予想以上に男の酷い様子を見ることができたおかげで気が済んだのか、シーナは荷物を拾ってやりそのまま男を引っぱってビルの間道に連れて行った。

「きききき君は俺に何の恨みがあつてあんな、あんなことを！」
人目を避けたのはいいが男の目には、うつすらと涙が浮かんでいる。

「待つて待つて言ったのに勝手に帰った罰でーす」

「そんな勝手な！ 俺は君みたいな子供は知らないし、君の言うことを聞いてやる義務もないんだぞ！」

男の言い分はもつともなのだが、せつかくの『ベルリンズ』をじっくり読めなかった上に雪はさらに大粒になっていてシーナも少々へそを曲げていた。宙に浮いたり空を飛んだりできるわけではないので真つ白な靴は最初の予想通り泥だらけになっていた。

「そんなこと言ったつて私にもおじさんを引き止める理由があるんだからしょうがないしー。本当はこんなことしてないで早く帰りたいんだからおじさんも協力してちょうだいよ」

同意し難い強引なシーナに男は遠くを見て気をそらそうとした。

「とんでもないガキに捕まっちゃったな……」

シーナはむくれ顔だ。

「ちよつと、それは心の中で思うところでしょ。それよりほらほら、質問でーす。『なぜあなたは寄付をしたのですか？』早く答えない

と私に、“めめーぞん”のシヨコラ・オー・キャラメリゼをおーご
るっ！ はい、5・4・3……」

「はあっ？ めめ……シヨコ何？」

シーナはにっこり笑って人差し指を立てた。

「ゼロー！ はい！ 時間ぎーれー。シヨコラ・オー・キャラメリ
ゼは“めめーぞん”おすすめ、この時期限定シヨコラシリーズのひ
とつでーす！ とろけるシヨコラと中の洋ナシが最高のハーモニー
！ わーお！」

シーナは漫画と同じくスイーツにも目がなかった。と言っても自
分で買いにいくわけにはいかず、黙っていたただくのは一番悪い子が
することだとレインからキツク言われているため、こうして買って
もらうという手段を使うのだ。ジャックに帰ったら食べると宣言し
ていたものも前日この手を使って買ってもらった、シュークリーム
専門店“跳ね馬”のダブルカスタードと苺のシュークリームだった。

ヲタ優位！中の下！（前書き）

話す相手は選びたいものです。あなた、張力注意ですよ！

ヲタ優位！中の下！

シーナたちの体は何も食べなくても生きていけるようになっていく。それでも定期的に食べ物を体に入れているシーナとレインは体が温かく、基本的に食べないジャックと違い体温なるものが存在しているのだった。

もう頭の中が限定ケーキでいっぱいになって頬を赤くしているシーナに対し男は目の前の夢見る少女にほとほと困り果てていた。

自分がくだらない夢を見ているのかとも思い、一度目を閉じてからそうつと開けてみたがそんなわずかな希望もあつさり打ち砕かれ頭を抱えてしまった。そのまましゃがんで大きなため息をつく。

「そのー……なんだ、君そのシヨコなんたらが欲しくて俺に付きまといつてるわけ？　じゃあ好きなだけ買ってあげるからそれ持つて早くお家に帰ろうねー。ほらお店どこ？」

「きゃーあ！　いやーっ！」

いきなりシーナが両手を上げて飛び跳ね始めた。いや、と言っても感謝感激しているだけだ。シーナは自分の感情に実に正直だった。それにしてもこれでは聞きようによつては襲われて悲鳴を上げているようなので男は慌てて周りを見回す。

「ちよっ、バカ！　静かに！　なんでそうなるんだ！　頼むから静かに！　しーっ！」

好きなだけ買ってもらうなんて夢のような話だ。シーナのことだから迷うことなくケーキだけ抱えて何もせずに戻ってもおかしくない。しかしレインはきちんとシーナを教育していたため、することはしてから好きなだけ買ってもらうという結論にきちんと辿り着くことができた。ひと通り騒いだから、もういちど本題を切り出す。

「つとー。じゃあ、その前にもう一度聞きます。さっき答えなかったもんねー。『なぜあなたは寄付をしたのですか？』はい、答えてー」

男が神妙な顔になる。

「なんでそんなこと聞くんだ？　そもそもそれを知ってるってことは君もあの会場にいたってことか？」

「もー。おじさん私の話聞いてたー？　私そんなこと聞いてないし早く愛しいシヨコラ・オー・キャラメリゼに会いたいのー」

「だって初対面でなんでそんなこと聞かれるんだってなるだろ？

それにおじさんおじさん言うな。院の中じゃ若くてお兄さんの存在だって評判なんだよ、これでもな」

明らかにがっかりした顔のシーナが小さくため息をついた。

「おじさん、それ悲しすぎる。社交辞令ってやつでしょ？　そう言っとならば点数稼げるみたいなさあ……」

言いかけてケーキのことが頭をよぎる。

「あー、でもでも確かに若いよねっ！　じゃあお兄さん……？　お兄さん……うーん」

その様子を見て居たたまれなくなった男が音を上げた。

「わかった、わかったよ！　だけど君が一体誰なのかもわからないし、何でそんなことを聞かれるのかも、何でシヨコなんたらを買ってあげなきゃいけないのかもわからない。言ったからには買っただけだよね。とにかく君はもう少し詳しく説明するべきじゃないかな」

ヲタ優位！後！（前書き）

人は見かけで判断できません。あなた、記憶注意ですよ！

ヲタ優位！後！

困り顔の男を見ながらしばらく頭を悩ませていたシーナが、なるほど顔になっていきなり右手をビシツと上げた。

「私はシーナです！」

「……それはそれは。俺は佐伯 京介だ。あの場にいたなら知ってるだろうが親父の院……あー病院で働いたただの医者だよ。って君の名前だけじゃさっぱりわからんぞ」

もしこれが晴れた日の昼間で、さらに暗いビルの合間でなかったなら佐伯はきつと、その目はカラーコンタクトなのか検査すべきものなのかということでシーナを困らせていたことだろう。

「京介？ いやーん！ 京介だってー！」

佐伯は残念なことにシーナが好きな漫画の主人公と同じ名前だった。そのせいで見た目は自分よりずっと若いシーナから簡単に呼び捨てにされることとなった。

「でー？ 京介は私の何が知りたいのー？」

変な誤解を招きかねない言い方だ。佐伯はシーナと普通に会話することを望み薄と感じていたため諦めモードに切り替えてシーナのペースに合わせることにした。

「あー、そうだな。じゃあ君は誰なんだ？ 何で俺にそんなことを聞く？」

キョトンとしてシーナは首を傾げた。

「誰ってー。『私はもしかしたら未来のあなたかもしれません』だから、質問するのです、だよ。合格か不合格かでその先に進むかどうか決まってーそのあとは合格した人だけのお話ー」

「なるほどなー……なんて、言うか！ 全っ然わからんぞ！ 未来の俺かもしれない？ どこがだ！ ああもう何もわからんぞ！」

「もう。たまにいるんだよねーこういう人ー。京介は選ばれたけど、その先の説明をしてもらえるのは合格した人だけー。だからとにかく

く質問にちゃんと答えてもらわなきゃどうにもできないってわけー。はいっ！『なぜあなたは寄付をしたのですか？』」

（子供の遊びにしちゃーずいぶんしつこいよな。ほんと世の中にはいろんなやつがいるよ。こういうめんどくさいガキとかな）

元から童顔で背も低く年齢よりずっと下に見られていた過去を持つシーナを本当にただの子供だと思っているのだ。

困惑を通り越し、冷やかな気持ちさえ覚えた佐伯がため息まじりに答えた。

「なぜって、あの金は親父があくどいこととして患者から巻き上げた金だからな。ちょうど留守にしてくれたおかげで楽しいイベントに参加できたんだよ。ってね」

口を開けて聞いていたシーナは頭をフル回転させて情報を分析していたが、それだけでは判断できずもう少し情報を増やすことにした。

「つまり？ えーっと詳しく聞かせてくださいな」

シーナの一言で佐伯は堰を切ったように話し始める。

「君みたいな子が聞いてわかるとは思えないがー、まあつまり親父は昔っから患者を騙して二重三重に金をとって、貯めに貯めた金でやたら高い外車だの女遊びだの無駄な別荘だのって使い方をしていたわけ。そしたら女と旅行っていうちょうどいいタイミングで医療イベントがあったから勝手に参加して勝手に全額寄付してやっただけだよ」

「めえ」

シーナが間抜けな相づちを打った。

「だって来るたびに初診料が発生したり、診てもらってないのに診察代が発生したりするのはおかしいだろ？ 日帰り検査のはずが入院させるし必要のない高級機械使って、いらぬ検査したり風呂に入れてないくせに風呂代を一日何回分も計算に入れてたり、そのどれかが尋常じゃない金額で、だから医者はいい商売ねー。なんて言われて……って……わかんないか、やっぱ」

「……」

相変わらず口を開けたままバカみたいな顔をしているシーナは話を聞きながら首を傾げてフリーズしていた。

「おーい、しいなちゃん。わかんないにしても、その顔はないでしょ？」

「えーっとー、そうじゃなくって、いやそうじゃあるけどー。まあ不合格は不合格なんだよね。だから私としてはおめでとうと言うべきなのかなー？」

佐伯は目を泳がせた。

「何だかわからないにしても不合格って言われるのは感じ悪いな。軽くシヨックだし。ってことは何？ 不合格で罰ゲームか何かあるわけ？」

シーナはその言葉に一瞬驚いてから楽しそうに笑い、うつすら雪化粧された髪を揺らしながら首を振った。

「ないない。不合格って言うのは、こっち側で勝手に決めた基準だから。んー、かなり迷うけど今回は面白い話聞けたから愛するキヤラメリゼはあきらめてあげる。いい夢を、さよなら京介……」

「は？ 夢？」

シーナは背伸びをして腕をいっぱいにのばし両手で佐伯の頭を掴む。

その次の瞬間、佐伯は意識を失いその場に倒れこんだ。

「……今日は雪の日。ってことは寒いからこのままじゃ凍死しちゃうのかな？」

シーナはググっと力を込めてしゃがみ込んでから目の前にあるビルの非常階段に飛び移った。そこからぴょんぴょん上っていき最後に屋上まで飛び上がる。

雪が積もり始めていた屋上から手で作った拡声器の力を借りてきちんと最後の仕事をした。これもレインの教育の賜物だ。

「誰かきてー！ ビルの間に人が倒れてるー！」

声を聞きつけ小さな人影が佐伯に駆け寄っていくのを確認してか

らシーナはその場を離れた。（今の分取り戻すために五倍速で急ぐにゃー）

記憶は消えない。目を覚ました佐伯は最初に願った通り、ただのくだらない夢だったと思うことだろう。

社長ビビる！（前書き）

そうですか、驚きますか。あなた、信用注意ですよ！

社長ビビる！

レインのせいで赤い顔をしている彩内院の手に一枚のカードが握られていた。翡翠色のカードには『あなたで人を助けましょう』の文字が入っている。

「選ばれし君はこのレインさんがちゃんとしてくれるから安心してねー。仕事が終わるまで待っててもいいけど。まあ今日中であるなら好きなタイミングでどうぞ」

「いいよ別に今すぐでも。どうせ僕はここにいたって何にもしてないからね。そうだ金を準備していかなきゃだろ？ 五千万？ 一億？ 感覚がわかんないからビシッと額を言ってくれたほうが助かるんだけど」

頬笑むレインが八本目のボトルの最後の一滴をグラスに落とした。その昔王族だけが飲むことを許されたというラムもレインにかかれば数分でこの通りだ。レインは洋酒をよく飲む。だが細かい好みはないので基本的に酒なら何でもよかった。

「いやいや。今は持っていていいよ。それからムキムキくんたちもお留守番。彼らの代わりはレインさんが務めるよ。誰かに行き先を教えるのも絶対にダメー」

レインが口に指を当てて見せる。

「へえー。そんなにひよろこくて彼らの代わりができるのかな？ いいかい優男くん、彼らはエリートの中のエリートで……」

彩内院のセリフにひょいっと眉を上げ、グラスを持ったまま窓際につかつかと歩いていったレインは、空いているほうの手で指切りの形を作りその小指で窓をなでた。

背筋が凍えるような音がして一瞬でクモの巣状の亀裂が全面に広がり外が見えなくなった。

あこが外れそうな彩内院は、ショックで持っていたグラスを落としてしまった。その中身が、この時代に一千万という正気とは思え

ない金額のカーペットに変な模様を作る。

「合わせガラスで良かったねー。って言ってもガラスが地上に落ちないように加減したんだよ。レインさんそこまでバカじゃないからさ」

彩内院が顔を引きつらせてブンブンブンと縦に首を振った。

「それ、了解、ってことでいいのかな？　じゃ準備できたら行くよ。今日が終わる前にねー」

マダムだし！（前書き）

ああ、だから寒いんですね。あなた、責任注意ですよ！

マダムだし！

珊瑚色のカードをまじまじと見つめるさえ子はベッドに広げた毛皮のコートの前に立っていた。

「んじゃ俺様もう行くけど、絶対必ず確実に今日中で頼むぜ？ズルして車なんか拾っちゃダメだからな。行き先は誰にも教えない、の約束なんだから」

さえ子は指先でコートをなでた。

「この私が自力で歩かなきゃいけないなんて信じられない。でもおかげでこのコートを着る機会ができたわ。一度も袖を通してなかったのよねー」

クローゼットの中には、このコートと同じように買ったままの状態で保管されている服が、店を開けるほどたくさん詰まっていた。

「それにしてもこれって怪しい宗教の勧誘とかじゃないでしょうね？」

窓枠にしゃがんでいるジャックが笑う。

「そういうんじゃないって。俺様たちは、おばちゃんみたいな人見つけて導いてるだけだよ。ま、そこまで行けば係が親切丁寧に案内してくれるからさ、そんじゃ氣ーをつーけてー」

そう言っただけのまま背中から外に落下した。

「やだ！ ちょっと二階から……」

さえ子は青ざめ急いで窓に駆け寄って下を見たが、すでにジャックはいなかった。正確には、地面にはいなかった、だが。

ジャックは落下地点から数十メートル離れた電信柱のてっぺんで早速次の獲物を探していたのだ。

風に吹かれながらまたばやく。

「……ほんとにレイン戻ってこねーし。あと何人いると思ってんだよ……シーナはハズシたらほとんどん次行けよなー。俺様泣きたくなってきた。聞いてんのかお前らー？」

ジャックの声はちゃんと届いていたが、それどころではない二人は当たり前のようにジャックを無視することとなった。

レインは百二十年もののワインをラッパ飲みしながら彩内院と人気のない道を歩き、シーナは新しく見つけたおじさまを前に“めめーぞん”のカフェコーナーで口いっぱいシヨコラ・オー・キャラメリゼをほおばっていたのだから。

「……二人とも、ひでえな」

ジャックはこの街に配属されて間もないためか、その前から一緒にいた二人に未だこういう扱いを受けていた。

年の離れた末っ子扱いでかわいがってはもらえる反面、貧乏くじはいつもジャックが背負うのだ。

三人とも体に寒さは感じないし、もちろん凍死するなんてこともないのだが……なぜかジャックは心にブリザードを感じていた。

「はあ……あー、仕事しよ」

目をフル稼働させて、レイン曰く“偽善オーラ”を見つけ出す。それぞれ見え方は違うがジャックの目にはそれが白っぽい光として映っていた。

（俺様がくるまでは二人つきりでノルマ達成してたのか？ そういやー俺様、昔のことって聞いたことないんだな……）そんなことを思いながら目の端に白い輝きを感じ最短距離で現場に向かった。

寒空徒歩！前！（前書き）

裏道は知っている人が案内を。あなた、足元注意ですよ！

寒空徒歩！前！

彩内院と並んで街を歩くレインは途中で見つけたゴミ箱にワインの瓶を置いた。

カードの地図がさっぱりわからなかった彩内院のため、本当にレインが案内をする形になったのだ。

性格上、自分の前に誰かがいるなんていうことが許せない彩内院は前に出しゃばりたい気持ちを抑えながら何とか横に並んで歩くことで妥協していた。

「ねえ、ねえレインってまさか本名じゃないよね？ ニックネームだろ？ それともバカでかいから日本人じゃないのかな？」

目的地までは普通に歩くと結構距離がありレインと違って酔っている彩内院の足に合わせるのによけい時間がかかっていた。そのため道中の暇つぶしも兼ねて彩内院はレインに質問ばかりしているのだ。

レインはふらつく彩内院を横目で見下ろしながらどこまで話すべきなのか考えた。

「うーん……みんなその場で名前をもらえるんだけどレインさんは自分で名前変えちゃったの。雨が好きでいい男すぎて晴れより雨が似合うからレインさんってね」

酔っぱらいは細かいことには気がつかず思いつくまま次々に言葉を発していく。

「じゃあ君さあ、なんでマフィアみたいな格好してるのかな？ そういうのって今どき映画でしか見ないよ……マフィア？ うわ！ まさかつ君、身代金目当てに僕を誘拐する気なんじゃ……！」

ボディーガードがいないことを思い出し千鳥足で逃げようとした彩内院はレインに首根っこをつかまれジタバタともがいた。

「うちはっ、金ならあるけどっ、誘拐なん、てー冗談じゃ、なーい！」

レインは聞かん坊でも見るような目でやれやれ、と息を吐いてそのまま彩内院を子猫かなにかのように自分の顔の前まで持ち上げた。「あのねー。レインさん、君のそういう姿見るのは楽しいけど誘拐の趣味はなーいの。オーケー？」

大男に片手で持ち上げられて彩内院も少し酔いが冷めたのか少なくとも暴れなくは、なった。レインがそつと地面に戻す。

「その発想こそ映画の中だけにしといてね。このマフィアマントかコートかは人によって変わるけど、まあ仲間の印かな。ちなみにこの長さは格が上だよってこと。引きずるの嫌だから少し上げたんだけどね」

レインがコートを少し短く直したのは見た目のバランスとして白の靴を見せるため、という理由もあった。しかし以前仲間だった男から「おしゃれはさり気なく」という教えを受けていたため、わざわざそのことを口には出さなかった。

「誘拐じゃないなら僕を連れて行くことで君に何のメリットがあるんだい？ それに格が上、ってことは君は上司か何かってことなのか？ 仲間がいるって言ったけどそのお仲間が僕を欲しがっているってことなのか？」

いつの間にか雪は止んでいた。風は相変わらず身を削り取っていきそうな勢いで路地を吹き抜けていく。

立っているだけでも絵になるレインはその風にコートと髪をなびかせて本人も意識せずして映画さながらのワンシーンを演出していた。

寒空徒歩！中！（前書き）

紳士は絶滅危惧種です。あなた、高揚注意ですよ！

寒空徒歩！中！

彩内院は酔いが冷めたことで寒さを感じたのかコートの前を合わせて白い息を吐く。歩きながらその様子を見ていたレインは、フツと笑ってから自分のコートをさあっと脱ぎ彩内院の肩に、そつとかけた。

「え？」

驚きよりも見た目以上に温かいコートの必要性が勝ち、アルコールとは違う意味で赤くなった彩内院は黙って好意を受け入れた。

ただでさえ長いコートは、どうしようもない身長差のおかげで地面を引きずられ、とけかかった雪をなでつつ吸収していった。

「君って質問はひとつずつって法則がないんだね。えー、まずこれがレインさんたちの仕事であってメリットとかじゃない。強いて言うならレインさんはいいいお酒をいただけるのがメリットかな。そして格は上だけど上司ではない。レインさんたちは役割分担の外組だよ。本当のトップは別にいる。レインさんたちはうーんと大きな組織の一駒にすぎないんだ。それで……ってどこまで聞きたいのかな？」

レインのコートにくるまれてぬくぬくしていた彩内院が当然のように答えた。

「全部。僕がどういう状況にあるのか理解するためにも案内をしている君が何者なのか知る必要があるのは火を見るより明らかだ。そもそも出発前にそういうことは話すべきじゃないのかな？」

秘書がいたらなぜ仕事の中にそういう当たり前でまともなことを言ってくれないのか、と嘆いたことだろう。

彩内院はすっかり正気に戻っているがそれは今だからこそ言えるセリフだった。

出発前は隠し酒蔵をほぼ空にした結果、思考回路がいつも以上に遠くへ出かけてしまっていたのだから。

レインがにつこり笑った。なんだかんだ言って彩内院と一緒にいるのが嬉しいことに変わりはないのだ。

「じゃあ、説明するとー、この街にはレインさんのほかに二人の外組がいて同じ仕事してるんだけど、そっちはまだまだの二人でピヨピヨちゃんなんだー」

外組には離れていても意思が通じ合えるという便利な力が備えられている。この仕事をやっていく上で必要な能力だった。

シーナは聞こえてきたピヨピヨちゃんの言葉のかわいさに大はしやぎして目の前にいるターゲットを驚かせ、ジャックは（へいへい、そうでしょーともー……）などと、思いながらこの日最後の一人を追いかけて行った。

レインが言う“格”は、能力や経験によって判断され、行動の品位などでも変化した。だが形が変化したものをまとうだけであって着ている服が勝手に伸び縮みするわけではない。

格は上でもリーダーなどという位置付けではなく、三人の間ではみんな仲間、だが基本的に仕事は自己責任、単独行動。ということころだった。

そしてシーナのコートはジャックより短くお尻が隠れる程度。悲しいことにキヤリアはあってもその振る舞いからジャックより格下扱いなのだった。

寒空徒歩！後！（前書き）

自然なエスコートは素敵です。あなた、勧誘注意ですよ！

寒空徒歩！後！

レインはでかい、黒い、妖しいの三拍子。コートを着ているときには何か危ないものを装備していてもおかしくない雰囲気を漂わせていた。もっとも今は青く見えるほど白いシャツに黒く細めのストリーートのボトムを合わせているだけなので上着を脱いだホストといったところだろう。

輝く白シャツにかかる艶髪が揺られながら互いのコントラストを強調している。

「外組って……僕も一流企業のトップにいるわけだし大概の組織は知ってると思うってたけど君らみたいなのは聞いたことないね。マフィアじゃないにしても外国の組織か何か？」

「そうだねえ。外国っていうよりは世界規模の組織だね。助けを必要とする人がいてそれを助けるための力を持った君みたいな人が選ばれる。そういう係が世界中にいて、そしてレインさんは君をここに案内してきた。ってことなんだ」

レインが、ずっと腕を上げ目の前の建物を示した。見た目は一軒家のようなが国籍不明で見るからに古く、建物自体がアンティークの作品のようだ。窓や壁がセピア色になり全体にツタが絡まってここだけ違う空気が流れているように思われた。

「うっわ。すごいな。ここは赤ずきんでも住んでるのか？」

レインが頬笑んで目を細めた。

「レインさんは赤いずきнкаぶったチビちゃんよりも素敵な王子様がいてくれるほうが嬉しいけどねー。はい、さっきのカードを出して」

彩内院は言われるままにポケットに入れてあったカードを取り出した。

「じゃ、それを入り口で出すんだよ。レインさんの仕事はここまでなんだ。大丈夫。レインさんも入ったことあるけど危ないところじ

やないから心配しないで」

そう言って入り口のドアをノックした。

「いい男一名様ご案内です！」

恐ろしい魔女でも出てきたら逃げようと思っていた彩内院だったが、にこやかで姿勢のいい若者に出迎えられてひとまず胸をなで下ろした。

若者の服装も建物同様に国籍、時代共に不明だがすっきりしていて感じのいい印象を与えるものだった。

「はい。ご苦勞様。ではカードを拝見しましょう」

きれいな頬笑みで片手を差し出しカードを受け取る。

「翡翠ですね。外は寒かったでしょう？ さあ中へ」

彩内院は言われたほど寒くない理由を思い出し急いでコートをレインに差し出した。その裾から滴る泥色の雫。

「ああっ！ そうか僕のほうが小さいから！ すまなかった。全然気付かなかったよ！ 今クリーニング代を……」

懷に手を入れた彩内院をレインが笑顔で止めた。受け取ったコートはそのまま二つ折りで腕にかけている。

「何言ってるの。レインさんこれ承知で貸したんだよ。それより脱いだなら寒いから早く入って。中はとっても暖かいからね」

「そうか？ほんとにいいのか？ じゃあお言葉に甘えんとするか。ところでレイン、君はここで僕の用事が済むのを待つのかい？」

一瞬「？」という顔になってからレインが嬉しそうに笑顔を見せた。

「レインさんそうしたいのは山々だけどダメなんだよね。一応ここでさよならしなきゃ。それじゃお酒ごちそうさま。いつかどこかで会えるといいね……塔哉」

彩内院は帰り道のことを一瞬心配したが係の若者に促されて、手を振るレインへ反射的に手を振り返してからドアの向こうに消えた。案内係が軽い会釈をしてからドアを閉める。

「はあ……ほんっといい男になっちゃって」

閉まったドアを見つめるレインは彩内院の顔を思い出して頬を赤く染めた。

流石雨兄！（前書き）

時に冷静に、時に・・・。あなた、甘党注意ですよ！

流石雨兄！

「……ん？」

変な音がレインの耳をくすぐる。

……

だんだん近づいてくる声。

………やあああああああああ！

声と共にレインの真上から白い塊が落ちてきた。

空を見上げたレインは、それをあきれた顔で見つめながら最高のタイミングでひょいっと一歩横に移動した。

「ぴぎゃっ！」

気持ちの悪い音がして白い塊がべちゃっと地面に張り付く。

レインは冷ややかにそれを見下ろし、つま先でコッソンとつついてやった。

「んぎゃあああ！」

塊から恐ろしい悲鳴が上がったがレインは眉一つ動かさない。気にすることなく腕のコートをばさっと広げ、遠心力で雫を吹き飛ばしてから静かに羽織る。

するといきなり地面の塊が跳ね上がって口を利いた。

「って！ ちょっとレインひどいじゃないの！ 私を何だと思ってんのよ！ いいかげん頭の上に着地させなさいよね！」

「おバカさんもほどにしないと漫画とスイーツ禁止令出しちゃうよ？ レインさん今感傷にひたってたの。頭の上ってシーナが乗るところじゃないの！ 顔にチョコつけたまま街に出てたとか信じられないのっ！」

「……えっ？」

シーナが急いで顔をこするが落ちるところかチョコは広がっていく。

あきれたレインが拭く物を探した、ちょうどそのとき丸眼鏡の男

を連れたジャックが最後の角を曲がって歩いてきた。

シーナもジャックに気付いて両手を振る。

「あつ。ほらほらレイン！ あれが今日最後のひつとりー。だから私もここにきたんだっただー」

妙な調子で歌うようにしゃべるシーナの姿を確認したジャックが眉をしかめた。だが、鈍いシーナはそんな様子に全く気付いていない。

何でジャックがご機嫌斜めか理解しているレインは、どうやって機嫌を直してもらおうかと頭を巡らせていた。

そしてジャックは二人に見守られながら丸眼鏡を目的地に案内し終えて、二人の元に威勢よく歩いてきた。

「おーふーたーりーさんっ、俺様に何か言うことあるんじゃないかなー？ シーナ、顔が茶色になってる！ 今日は何食べたんだよ。

レインも半日で一人とかひど……って酒くせーっ！ もう！ 俺が……！ うわあっ！」

話しているジャックの後ろにサツとしゃがんだレインが、頭をジャックの足の間に入れていきなり肩車で持ち上げたのだ。

「バツ、何すんだよ。俺様は子供じゃねーんだ……ぞ……」

レインより小さいとはいえジャックでも一七〇近く身長があるのでその視線は楽しむに値するのだらう。顔を赤くしながらもおとなしく乗っている。

とたんにシーナが大騒ぎを始めた。

「あー！ ジャックばっか！ ずるいずるーい！ 私も頭の上に乗せてよー！」

「あのね、頭の上って肩車でさえないし。シーナはレインさんをどうしたいわけ？ ほらバカ言っでないで、もう帰るよ」

「あつ、じゃあ寄り道して！ “めめーぞん”に荷物預かってもらってるのー！」

「はいはい。荷物、ね。レインさんそんなことだろうと思ってたよ」
「おい、ちょっと待てよ！ その前には俺様降ろしてくれよ？ ……」

…今はまだいいけどさ……」

「はいはい。それも、もちろんわかってるよ」

三人とも傍目には、ただの仲がいい兄弟か親子にしか見えない。レインの前だと大人のはずのシーナもジャックもただの子供のようになっってしまうのだ。今ではすっかりお兄さん気質のレインは、そんな二人を思いつきり甘やかしてやるのだった。

第1の部屋！（前書き）

アトラクションではありません。ただの待ち部屋です。あなた、
順番注意ですよ！

第1の部屋！

彩内院は返されたカードを裏表確認してみたが特に変わったところはない。本当にただ確認しただけのようだ。ポケットにしまってから教えられた通りに次のドアを開けると、入り口の若者と同じ服の女が立っていた。

最初の部屋と同じで窓もなく、薄暗くて狭い部屋の中には制服を着ていない人間が彩内院を入れて三人。彩内院を除く二人は背を向ける形で前後にならび黙って下を向いていた。その先にはまたドアが二つ。制服を着た髪の長い女がそのドア付近に笑顔で立っている。目の前の係が紙挟みとペンを差し出した。

「はい。これを書きながら列に並んでください。簡単なアンケートなので深く考えず気軽に書いてくださいねー」

（ああ、これ行列だったのか……）サラリーマン風の男の後ろにいた彩内院は受け取った紙に目を通す。街でやっていそうな、ただのアンケートだ。彩内院は、安心してさっさとペンを走らせ始めた。彩内院は気付かなかったが、もし目の前の男にもう少し近付いていたらケーキ屋独特の甘い残り香を感じられたかもしれない。

しばらくすると先頭にいた白髪まじりの男が顔を上げて紙挟みを係に渡した。

「はい。終わりましたか？ では……」

二つのドアの前で、受け取ったアンケートをじっくり見ていた係の女は腕をのばし次の道を示した。

「あなたは左ですね。どうぞ」

笑顔で見送りドアを閉める。彩内院は次のドアの向こうが気になったが首をのばしても暗くて何も見ることはできなかった。

* あなたは人のために何らかの行動を起こすことができますか？

* あなたは誰かを助けることに意味があると思いますか？

* 人助けに喜びを感じられますか？

* ボランティアをしたことがありますか？

* あなたはお金の使い道に困ったことがありますか？

* 人間は平等だと思いますか？

* あなたは神の存在を信じていますか？

* あなたの周りに……

という極ありふれた質問は全部で五〇問あり、すべてが「はい・いいえ」のどちらかを選ぶようになっていて、中間の選択肢はひとつもなかった。

（心理テストみたいで楽しいけどちょっと多いかな）

彩内院が、やっとで最後の一間にキュツと丸をつけて顔を上げるとニコニコと手を差し出す係がすぐ目の前に立っていた。

「それでは確認しますね」

紙挟みを渡してから彩内院は背伸びをする。アンケートに集中していたせいか周りを見回して初めて自分の後ろに一人並んでいることに気が付いた。（一体何なんだろうな。そう言えばこんなに長くボディーガードなしでいるのなんて初めてだな。今さらだけど、すごい開放感じゃないか……）

彩内院は小学校にあがる頃から当たり前のようにボディーガードと共同生活を送っていた。

「はい。あなたは右へどうぞー」

考え事から現実に戻されて言われるままにドアの前に立つ。

係がドアを開けて誘導し、彩内院は次の空間に踏み込んで行った。

第2の部屋！（前書き）

あなたが見ているものは本当に存在していますか？あなた、感覚注意ですよ！

第2の部屋！

が、

「……え？ 何で？」

彩内院は目をこすってから眼鏡をかけ直し、もう一度目の前に広がる景色を見た。

「何で？」

もう一度呟いてポカンとした。自分がいる空間があまりに広すぎるのだ。

セピア色で照明が淡く薄暗いせいもあるが、端はかすんでいて見えないほどに遠い。何もないその広大な敷地の中に、ぼつんとちっぼけな彩内院が立ちつくしているだけなのだ。

思わず後ろを振り返ってしまった彩内院はもつと嫌な事実を知ることとなる。

今通ってきたはずのドアが消えている。それどころか壁もない。

自分を中心とする全方向、ただひたすらに端が見えないほどの空間が果てしなく広がっていた。

“危ないところじゃないから心配しないで”という言葉が思い出された彩内院の目に涙が浮かんだ。

「レインの……嘘つき……」

ベソをかく背中から優しい声が聞こえてきた。

「彼は嘘つきじゃないよ。彩内院 塔哉」

ビクッとして振り返ると小さな少年が、はだしで立っている。髪も肌も目も体を包んでいる服らしきものも全部が白一色で彩内院は自分が幻覚を見ているのかと心配になった。

「勘弁してくれ。今度は真っ白人間か……」

そのインパクトのせいで、自己紹介の覚えもないのに名前を知られている事実に気付いていない。

「僕は、ただの創り物だよ彩内院 塔哉。ここにきた人が最後の決

断を下す前にこうやって話をするためだけのイメージとして存在してるんだ。その証拠にほら、彩内院　塔哉は僕にさわれないでしょ？」

少年が差し出した手は何度試してもふれることができずに通り抜けてしまい何の手応えも感じられなかった。

「あ、ほんとだ……」

落ち着いた彩内院は、ふと頭に残っていた単語を思い出し“ただの映像”に問いかけた。

「ねえ、そう言えば君、レインのこと知ってるの？」
白い目が、ずっと細くなった。

「内緒。だって彩内院　塔哉は、この部屋に入ったばかりでしょ？　まだ少しも前に進んでないもん」

「は？　進むって言ったってこんな何も無い空間に放り出されてどうしろって言うんだ？　わけわかんないよ」

少年が不思議な音で笑いだした。

「周りをよく見て。彩内院　塔哉」

あきれ顔になってもう一度見回す。

「だから周りならもう散々見たよ。しかも名前を呼び過ぎだ……あれっ？」

いつのまにか彩内院の足の下に道ができている。

相変わらず端は見えないままだが気が楽になった彩内院が急に元気を取り戻し、さっさと道なりに歩き始めた。

片側通行！（前書き）

その会話は成り立っているのですか？あなた、応答注意ですよ！

片側通行！

「なーんだ、ちゃんと道があるんじゃないか。さっきは何で気付かなかったんだろうね。でも道の終わりが見えないって言うのが唯一にして最大の欠点だよ」

少年も、ふわふわ歩きながらついていく。

「終わりはあるよ彩内院 塔哉。終わりがないように見えるのは僕と彩内院 塔哉の話が前に進んでいないって証拠だよ」

「……それどういう意味かな？ そして何でそんなに名前を呼ぶの？ いいかげん不自然だよ」

親からもらった名前をこれだけ呼ばれてやっと違和感に気付いたようだ。

「彩内院 塔哉は自分の名前が嫌いななの？」

「いや。別にそんなことはないけどさ。でも必要以上に呼び過ぎじゃないかな」

「嫌いじゃないなら呼んでもいいでしょ？ 彩内院 塔哉。僕、名前をきちんとたくさん呼ぶんだよ？ 彩内院 塔哉」

（子供ってこういう変なこだわり持ったりするんだよね……）彩内院は、この小さなルールを子供のお遊びとして受け取った。

「そうか。そんなに呼びたいんなら勝手にしてくれ。それにしてもいくら進んだって未だに何もわかんないよ。それとも君が全部説明してくれるのかな？」

少年がカラコ口と笑いながら彩内院の周りを回っている。

「彩内院 塔哉、ここは選ばれた君の本気を試す最後の間だよ。本当に誰かを助けたいと思っているか。つまり、彩内院 塔哉が知らない誰かのために何をしてあげられるのか、ってことの確認だね」

（あれ？）彩内院は、違和感を感じた。

当初の目的が思い出されたことで改めて自分は何をしているのかという状況を思うと何だか急にバカらしいという気持ち芽生えて

しまったのだ。

「君たちって、たかが募金させるただけに毎回こんなことさせてんのかい？　回りくどいにもほどがあるだろ。もう走り抜けてっていいかな？　何かほんと今さらなんだけど、これじゃ時間もったいないもんね」

少年が、すいつと道を空けてにつこり笑った。

「それじゃ永遠に走り続けることになるよ彩内院　塔哉。でも僕ときちんと話をして答えが出せばゴールがメートル先に出現することだって可能だ。この空間のルールは彩内院　塔哉次第で変わるんだからね」

彩内院は、このやり取りの感じは、つい数時間前に体験していたのと同じものだと思っていた。答えなければ進めない。要するに答えさえすればいいのだ、と。

「そういうことが。また無駄な時間を過ごすところだったよ。さあ、それじゃ質問してくれ。この僕が手っ取り早く答えてあげよう」

その態度に少年がキラキラと笑う。

「そうだね。それじゃ早速。彩内院　塔哉は知らない人を助けるのが楽しいのですか？」

「そうだねえ、まあ楽しいって言うか嬉しいかな。イエスノーで言うといエスだ。だって今日の少女たちみたいな顔されちゃさあ……あー、いや僕はロリコンではないんだよ。別に」

ふわふわ歩く少年が、ゆっくりとひとつ瞬きをした。

「それはどうでもいいよ。じゃあ彩内院　塔哉は募金した自分をつこいと思いますか？」

「もちろんっ！　当然、当たり前じゃないかイエスイエスイエスだよー」

あきれるほどの即答。少年が二つ瞬きをする。そして少し迷ってから探るように次の問を投げかけた。

通常運転！（前書き）

一生懸命なのはいいことです。あなた、機関注意ですよ！

通常運転！

「彩内院 塔哉が、なくして一番困るものとは何ですか？」

ゆつくり道を進み続けながら彩内院が口を開く。進んでも止まっても結果に影響はしないのだが道という形があるため反射的に歩を進めてしまうのだろう。

「ないね。何でもなくしたら買えばいいんだから。あ、ってことは金か？ でもそしたら募金するってことと矛盾しちゃう気がするな考え過ぎか？ じゃあない。なくして困るものナシってことで」

少年は少し驚いたようだったが瞬きを六つしてから彩内院の顔を見た。

「まさかとは思ったけど彩内院 塔哉みたいなのはひさしぶりだ。

さすがに過去最高記録には手も届かないけど。じゃあ彩内院 塔哉の一番大事なものは何ですか？」

「いやいやいや、ちょっと待ってよ。何その気になる発言。この僕がその誰かよりも劣るってこと？ 僕みたいな男は常にトップでいるべきなのに。どうすればそいつを抜けるんだい？」

少年の一言で徐々に彩内院の恥ずかしいナルシストスイッチが入ってしまった。

普通の人間なら多少困るところだが運よく少年は創られたものであって人間ではない。あっさり笑い飛ばしてしまった。

「ダメだよ彩内院 塔哉。あんなの異常だからね。彩内院 塔哉、君はそういう生物にならなかったことを心から感謝すべきだと思うよ。それで？ 彩内院 塔哉からさっきの答えをまだ聞いてないよ？」

彩内院は、かなり不服そうだったが背に腹はかえられない、ということで仕方なく答えを出した。

「これも金、って言いたいところだけどさっきと同じく、じゃあ募金するな、ってなっちゃうからね。大事なものなんてないよ。何も

ない、が答えだ」

ぱあつと顔を輝かせた少年が八回瞬きをしてから拍手を始めた。

「そんなにショートカットしてくれると僕としても、とっても助かるよ。ほら見て！ 彩内院 塔哉！」

永遠に続くように見えた道が目と鼻の先でひとつのドアにつながっているのが見える。

「うわ！ すごいな！ とういうトリックなんだい？ これ？ あれ開けちゃえばゴールってことでしょ？ それじゃ！」

いきなりドアめがけて突進した彩内院を少年は黙って見送った。それはそれは嬉しそうな顔で。

覚醒開始！（前書き）

その判断は誰のためですか？あなた、立場注意ですよ！

覚醒開始！

数分後、汗だくの彩内院は床にへたり込んで少年に大笑いされていた。

「ここから見るとね、彩内院 塔哉はその場で走り続けてるだけだったから、とってもおもしろかったんだよ」

運動なんてまともにしていなかったせいか未だ肩で息をしている彩内院はコートも上着も一気に脱ぎ捨てた。そしてシャツの袖をまくって一瞬動きを止め、あぐらをかいてから楽しそうな白い少年の顔をじつと見つめた。

その何かを悟ったような顔は、さっきまでと全くの別人だ。

「なあ……教えてくれ。これはトリックなんてレベルの話じゃないだろう？ バカな僕でもこれが普通じゃないことくらいいいかげん気付くさ。なんで買ったばかりの二〇〇〇万の腕時計の針はおかしな動きをしているんだ？ ここは一体何なんだ？ 僕は何に巻き込まれたんだ？ 僕をここに連れてきてどうする気だ？ これは何が目的の組織なんだ？ 頼むから教えてくれよ。わかるように説明してくれよ……」

汗を滴らせる彩内院の横に少年も静かに座りこんだ。

「おやおや、僕もここは長いけどこれは予想外の展開だよ彩内院 塔哉。でもドアが目の前に見えているからね。何にしてもゴールはすぐそこなんだよ彩内院 塔哉」

彩内院は黙ったままで少年の目を凝視した。

「もう、しょうがないなあ。リタイアする気かい？ 彩内院 塔哉。そうじゃないなら質問に……」

いきなり彩内院が少年の肩をつか……もうとした。両手が、すかつと空をきり唇をかむ。

「レインの時は僕からも質問して彼もそれに答えてくれたぞ。今回もそうするべきじゃないのかい？ ちゃんと答えてくれよ！」

少年は困り顔になってきた。

「ここまでできたのに彩内院 塔哉がこんなこと言い出すなんてね。でも残念なことに彩内院 塔哉がドアを開けてからじゃないと答えられない質問もたくさんあるんだ。要するに彩内院 塔哉が自力でゴールに辿り着けばその時にすべての疑問の答えを受け取れるってわけさ」

その言葉に彩内院の目が光った。

「本当かな？ 今回もそう言って先に引き延ばす気なんじゃないのかい？」

「僕らは人間じゃないから嘘をつく必要がないんだよ彩内院 塔哉。この世界はすべてがつながっている。多すぎては溢れる、少なすぎれば困る。たったそれだけのこと。そのプラスマイナス〃ゼロを保つために創られたのがここなのさ」

察知能力！（前書き）

冷静になれば見えてくるものもあるのです。あなた、出家注意ですよ！

察知能力！

「つまり僕はその溢れた方なんだろう？ だから僕はここに連れてこられた。それはわかってるんだ。けどなんでこんなことをするのかってことだよ」

「……彩内院 塔哉、あとはゴールに行かないと聞けない答えだよ。さあ、彩内院 塔哉はこの世の中で一番の間違いは何だと思う？」
時間の観念がないこの空間で、すでに虚ろな目をしている彩内院は遠くを見ながら答えた。

「すべて。この世のすべてが間違いだ……」

少年がゆっくり手を合わせてから三回瞬きをする。ドアまでの距離がぐんと近くなった。

ひとつ息を吐いた少年は立ち上がり彩内院の前にゆっくり歩いていった。

焦点が合っていない彩内院に手のひらを差し出して静かに口を開く。

「さあ……質問です。彩内院 塔哉、あなたが、この世に生まれてきたのは、一体、何の、ためですか？」

ハッとした彩内院が少年を見上げる。

大きく目を見開いた彩内院の中で何かが壊れ、驚きとその目覚めに時が止まった。

……………

そして、彩内院は一度も見せたことがないほどの眩しい笑顔を見せた。

「死ぬためだよ。僕は死ぬために生まれてきたんだ」

そのとたん……何かが弾けたような音がして一瞬で少年の瞳と髪と服が真っ黒に変化した。

「ゴールだよ！ おめでとう彩内院 塔哉。さて、せっかくだから脱いだ服を着たほうがいいよ。彩内院 塔哉にはその服がよく似合

っているからね」

やっと終わったという安堵感に包まれながら彩内院は身だしなみを整えた。

「それで？ 今度こそ開けてもいいんだろ？」

「うん！ 彩内院 塔哉が持っているカードはこのドアの鍵だよ。でもよく聞いて。ドアを開けてしまったらカードは消滅して後戻りはできない。でもカードを破ればすべてなかったことになって今まで通りの日々に戻る。彩内院 塔哉、これが最後の選択だよ。さあどうする？」

彩内院はポケットから出した翡翠のカードを高く掲げた。清々しく落ち着いた表情だ。

「構わないさ。それよりドアを開けたら僕の疑問すべてに答えるって約束を忘れないでくれよ？」

言い終わるなりドアの真ん中にあつた、他に使い道が思いつかない四角の枠へカードを押し当てた。

「もちろんだよ彩内院 塔哉。君は疑問を片付けて満足してからドアの向こうに行くといいよ。君の時間は永遠にあるんだから」

(？)

そのとき彩内院はカードの見た目に違和感を感じた。よく見れば『あなたで人を助けましょう』という一文の下に『一人を犠牲に――○○人を助ける』の文字。

深く考える間もなくカードは光のごとく消滅し、同時にカチツと小さな音が聞こえた。

26年前の！前！（前書き）

いつまでも続くものなんてあるんでしょうか？あなた、
態勢注意で
すよ！

26年前の！前！

二十六年前 日本

「ちよつと！ 私がこんな安物身につけるとでも思ってるの？ 冗談は顔だけにしてよね」

「でも、これは桜子のために俺が苦勞して手に入れた……」

「しつこい男は嫌われるの？ ほら、さっさと消えて。しつ、しつ！」

「ちよつとまたー？ 桜子ったらひどいんじゃないの？ あれ絶対泣いちゃうってー」

「あのくらい当然でしょ。私を誰だと思ってるの！ って感じだわ」

「出た出た、お嬢全開じゃーん」

「きやはは！ あーはっはっはっは……」

「何？ パパどうしちゃったの？ 当分帰国できないって言ったのに。それに二人ともひつどい顔で……」

「桜子、よく聞いてちょうだい。パパの会社ね、もうダメになっちゃったんですって。それも親会社から子会社まで全滅で莫大な借金しか残ってないの。もうこの家も人に売っちゃったのよ。それでも全然お金が足りないの。もし誰か頼れる人がいるなら、その人に頼んで……」

「ちよつと！ いきなり何言ってるの？ たちの悪い冗談はやめてよね！ この家は私たちのでしょ？ 借金って何よ！ 人に売っちゃったって何よ！ 私は嫌！ 絶対に出て行かないんだから！」

「パパを困らせないでくれ。これでもできることは精一杯したんだ」

「そうよ無理言わないで桜子。もう決まったことなの。しょうがないのよ」

「しょうがないわけないでしょ！ あんなにあつたお金がなくなる

わけないじゃないの！ 車もジュエリーもいくらだつて……」

「桜子、ひいひいおばあちゃまから代々受け継いできたこの指輪以外のものは……すべて人に売る手続きが済んでいるの。コートもフエラーリもダイヤのピアスも……真珠の一粒まで手放してもまだ……まだ、全然……全然お金が足りないのよー！」

「すまない。すまないお前たち……！」

「う……そ……そんな……」

26年前の！中！（前書き）

仏の顔も何とやらですね。あなた、切実注意ですよ！

26年前の！中！

「よく聞こえないな。何だつて？ もういつぺん言ってみるよ桜子ちゃん」

「だ、だから、私をあなたのうちに置いてくれないかって言ってるの！ あんた私のこと好きなんでしょ？ だから一緒に住んであげても……！」

「はあ？ 何言つてんだよ今さら。金がなくなつたとたんに集りにきてんじゃねーぞ！ 金が欲しけりや内臓でも売ればいいだろ。欲しがってるやつは大勢いるから、かなりいい値で売れるらしいじゃん。でもお前の内臓は真つ黒だから誰も買わねーかもな！ ざまーねーぜ！」

「ちよつと……ほんと？ それほんとなの？ 内臓つて売れるの？ どこで？ 誰が買ってくれるわけ？」

「うっわ！ マジかよ！ やっべー！ 桜子お前マジ笑えるって！ ヤバ過ぎだよ」

「いいから知ってるんなら教えてよ！ どこよ！ どこに行けばいいのよ！」

「信じらんねーやつだな！ 本気で言つてんのかよ。頭イカレちゃってんじゃん。ひとまず日本じゃ売れねーよ。本気で売りたいんだつたら……」

「どうしたのよ急にそんなとこ行きたいなんて。親に内緒で旅行にでも行くつもり？ あんたんちジェット持ってるじゃん」

「でもあれは使えないのよ。ねえ一般人が使う飛行機つてどうやって使うの？」

「どうつて、チケット買つて乗せてもらうのよ」

「チケット？ どうやって……」

「もう！ しょうがないなー。予約とかあるけど空港でお金出して

買うのが一番早いんじゃないの？」

「でも今は自分で使えるお金がなくて」

「ああ、やっぱり親に内緒系ね。じゃあ、決まってるじゃん。あんたがつけてるジュエリー総額いくらだと思ってるの。売っちゃえばいいじゃない。街にそういう店があって……」

「へえ。あんたいいとおの嬢さんかい？ それともこれ全部、彼氏からのプレゼントかな？」

「とにかくお願い。このピアスも本物のピンクダイヤだし。ここにあるのが全部本物ってわかるでしょ？ どうしてもすぐにお金がいるの。家に置いといたら取られちゃうから今じゃなきゃダメなの！」

「ふーん。事情アリねえ。ま、お嬢さんかわいいから買ってやるよ。まあおまけしてこんなもんでどうだい？」

「……それだけあれば飛行機乗れる？」

「いやどこに行くかにもよるけど、まあこんだけありゃそこそこ遠くまで行けるわな」

「そこそこって？」

「そりゃー……」

26年前の！後！（前書き）

そつですよ。事情は人それぞれなんです。あなた、同情注意ですよ！

26年前の！後！

「ちよつと桜子、あんた本気なの？ 旅行か何かかと思つてたのに、そんなとんでもないこと、正気とは思えない……」

「本気よ！ 内臓つて少しくらいなくなつても生きていけるらしいし売れば飛行機代を引いてもかなりのお金になるんだから！」

「誰に吹き込まれたのよ！ ほいほい内臓取り出して平気なわけないでしょ！ あんたの好きなおいしい物も食べられなくなっちゃうよ？」

「そんなのもういい！ このままでいたつて、どうせ好きな物なんか食べられなくなるんだから！」

「なによそれ？ それにそういうのって許可なしのヤブとかが極悪な環境で手術して下手すれば殺されるんだつて！ これマジなのよ？ お金が欲しけりや普通に働けばいいでしょ！」

「今さら働くなんてできつこないじゃないの！ それに健康な内臓欲しがつてる人いるんでしょ？ 人助けになるんでしょ？ いいから探して！ 私本気なんだから！ 家にも帰れないしもう行くしかないの！ 私、本気なの！」

「そんな……わかつたわよ。もう信じらんない！ そのかわり絶対後悔しないでよ？ どうなるうと私は知らないからね」

（こんなところで手術？ 香世の言つた通りだわ）

「ちよつと、何見てんのよ！ 日本人が珍しいの？ お金ならあげないわよ！」

「違う、彼らは手術待ち。あなたの内臓出してすぐ移植するから」

「え？ すぐ？ そういうもんなの？」

「順番待ちで手術して欲しい人はたくさんいる。手術で助かる命は多い。間に合わない人は、そのまま死んで行く。だからみんなあなたに感謝している」

「感、謝……？」

「若いのによくがんばった。ほら、約束の金ちゃんと受け取れ」

（痛い痛い痛い……信じられない。すごく痛いし気持ち悪いし吐きそう。麻酔切れるの早過ぎでしょ）

「いい、やだ！ いらない！ こんな思いして、その上それっぽっちのお金……いらない！ うるさい！ お礼なんか言うな！ 私みたいな汚い女に感謝なんかするなー！」

……

「ねえねえ、道端で寝ると風邪ひくよ？」

「なー……に？ 誰？」

「それにしても君人気者なんだね。嬉しそうな顔した人たちがずっと君の顔見てたよ。僕がきたらみんな逃げちゃったけどね」

「あ、そうか、私……。あー、ほんとバカみたい。何もかも全部が命を売ってお金だなんて……私が一番バカ、大バカ！」

「へえ？ じゃあ君は彼らに大事な命を寄付してあげたってわけなんだね？」

「知らないわよ！ 何なの？ あんた誰？ ナンパなら勘弁してよ。私今それどころじゃないの……」

「おやおや困ったね。きれいなオーラのお嬢さん。僕は君に、とても大事な話があるんだけどいいかな……」

5年前の！前！（前書き）

甘い考えのままに進むのは色々な意味で危険です。あなた、成長注意ですよ！

5年前の！前！

五年前 連合王国

「おいレオ、お前また覆面壊したんだって？ 俺たちにはヒーロー
だけど最近エスカレートし過ぎだろ。どうしたんだよ？」

「ポリの野郎がやたらうるつくせいでヤクが手に入りづれーんだよ
！ 手に入れんの一苦労なんだぜ？」

「それはわかるけどさー。お前、最近やりすぎだぞ。先週も川向こ
うの奴らに手出したばっかだろ。何でそんなことしたんだよ？」

「おとなしくよこせって言うてんのに渡さねーから、ついやつちま
ったんだよ」

「つい、って……またヤク絡みか。俺、ほんとにお前が心配だよ」

「はあ？ 俺がそんなこと頼んだかよ？ いいんだよ！ 俺みてー
なこの世の底辺にいる生きもんはこうやって世の中渡っていくしか
ねーんだからよ！」

「いつか、そうも言うてらんない日がきつとくるって。そのときお
前どうするつもりなんだよ？ 後悔しても取り戻せない物が……」

「うるせー！ 放つといてくれ！ もう子供じゃねーんだ。俺は一
人でもやっていくさ！」

「おい、待てよ！ レオ！ レオーツ！」

「あー……くつそー！ どいつもこいつも警戒しやがって。やつば
金を手に入れて買うほうが楽か……」

「へえ、いいものもってんじゃん。命惜しけりやそのケース置いて
消えな、おっさん」

「おいガキ、てめえその金が誰のもんかわかって言うてんのか？
だいたいアーミーナイフ一本でシヨットガンに勝てるとも思っ
てんのか？ ガキは家帰って寝……ぎゃああー！」

「バカが！ ただのアーミーナイフじゃねーよ！ 勉強不足だった
なおっさん。金はもらってくぜー」

「て、めえ……」

「あー？ 何だよ、ナイフ刺さったくらいで」

「くそ……あ……」

……

「あれっ？ マジかよ？ これ一発でくたばったってのか？ もっ
ろいんだなー人間って」

「うつわこんなにあるとはな！ やったぜ！ 楽勝！ これでしば
らくヤクには困んねーぞ！」

「ああっ！ こいつです、こいつがトムを殺っちまって金を盗っ
てったんで！」

「逃がすんじゃねーぞ！ やっちまえ！」

「落とし前つけろ！」

「よう、手癖の悪いガキにはお仕置きが必要だよな？ まずは小
指からだ。心配すんな。気絶なんかさせなーさ。最後は形もわかん
ねーくらいにしてちゃんと海に撒いてやるからよ。お前たち、やれ
！」

「おい待て！ 嫌だ！ 俺が悪かった！ 離せ！ やめてくれー
！ 俺が悪かったからー！ うぎゃああああああ！」

「……え？ 夢？ 何だよ夢か」

5年前の！中！（前書き）

そんな簡単なことだったんでしょか？あなた、自責注意ですよ！

5年前の！中！

「早く！ こつちですよ！ レオはいつもここで寝てるんです！」
「あ？ オリバー？ 何しにきたんだよ？ って……おい嘘だろ？」

「嘘じゃないさ。俺はお前を売ったんだよ。これで俺の安全は保証されるからな。何度も忠告したはずだよな？ いつかそれじゃすまなくなる時が来る、ってさ。無視したお前が悪いんだよ」

「そんな、まさか……嘘だ……」

「ご苦労だったなオリバー。あとは俺たちに任せとけ」

「心配すんな坊主。俺がこいつで痛みも感じないうちに地獄へ送ってやるぜ。あの世でトムに詫びいれるんだな！」

「やめろっ！ やめ……！ 嫌だ！ うわああああ！」

「？ はあっ！ はあっ……？ マジかよ？ また夢？」

「レーオー俺一人で地獄はさみしすぎるぜ……」

「俺の金……金……」

「よくも殺したなあ……」

「いてえ……いてえよ……見てくれよレオ……ほらナイフが心臓に刺さって抜けねーんだ……レーオー……ほら……ここから腐り始めてウジがわいてんだよ……とってくれよレーオーほら、血が止まんねーんだ……レーオーレーオー……ほらお前の腕見ろよ、針打った痕にもウジがわいてきたじゃないか……俺と同じだなーレオー……レーオー！ レーオー！」

「ああああああああああああっ！」

「もう勘弁してくれよ……」

5年前の！後！（前書き）

持つべきものは本当にそれでいいんですか？あなた、必須注意ですよ！

5年前の！後！

「オリバー、俺はどうすればいいんだ？ このままじゃ呪い殺されちまう！ どうすればいいんだ！ どうすれば！」

「金を返しても殺されるんだから、いつそ少しでもらって遠くに逃げて残りは寄付でもしちまえよ！ 匿名の寄付ならバレないし、逃げながら何力所にも分けて寄付すれば足は付かないだろ」

「ああ。ああ。この悪夢から逃れられるんなら何だつてするさ……」

「それからこれに懲りてヤクもきっぱり止めるんだ！ 人生これからなのに廃人になってどうすんだよ！ 鏡で自分の顔見てみる！ 情けねーとは思わねーのか？ お前は家や家族だけじゃなくてプライドまで無くしちゃったのかよ」

「！ ……………俺、お、れ…………」

「レオお前は、ああ言ったけど、神様はお前を見捨てたりしてないよ。だって俺っていう仲間をお前に与えてくれたんだからな。俺はお前を忘れない。どこに居たってレオはレオでいればいいさ」

「マジで、ごめっ…………」

「いいから早く行くんだ！ あいつら血眼でお前を捜してるんだぞ。ほらもう行けっ！ 元気で暮らせよ？ バカ野郎」

「…………ありがとう…………オリバー」

「寄付はこちらでどうぞー」

「この箱に入ればいいんですか？」

「はい。あら！ 若いのにすごい額ですね。何か経営なさってるの？」

「いや、株をやっているんです。一度寄付っていうのをしてみたくって」

「まあ、素敵。きっとあなたのような心の清らかな人には神からの祝福がありますよ」

「いや、そんなわけない。間違ってもそんなことないです……」

「やあ、お兄さん。ちょっといいかな？」

「な、何だよてめえ！ 俺をつけてたのか？」

「そうだよ。でも、つけてたからって警察じゃない。君、何か訳ありって感じたね。もしよければ僕に話して……」

「何者なんだ？ っておい待てよ、まさか奴らの手先なんじゃ！」

「違う、違う。僕は君の敵じゃない。ほんとだよ。ただ君があまりにいいオーラ出してるからさ。ちょっと聞きたいことがあるだけなんだ……」

ドアの向こう！前！（前書き）

その向こうに行くのは誰の意志ですか？あなた、**聞耳**注意ですよ！

ドアの向こう！前！

「……」

彩内院はカードに書かれていた言葉と少年の言葉の意味を一生懸命に考えていた。（それって、まるで……）

「はい。おめでとう！ 彩内院 塔哉。これで解禁だよ。彩内院 塔哉は何が聞きたいの？」

ドアの前の青年はスローモーションで振り返りながら静かに眼鏡を外した。

「カードのあれ……どういう意味なのかな？」

「あれ？ 書いてあるままの意味だよ彩内院 塔哉。あなたで、人を助けましょう。彩内院 塔哉を 犠牲に、一〇〇人を 助けましょう。それ以上の意味はないよ」

（僕が考え過ぎなのか？）頭を回転させると聞きたいことが次から次に思い出されたが、ひとまず目先の気になることから片付けることにした。

「そういえば君は何で色が変わったんだい？」

わざわざそれを聞いたのは、誰かがどこかで操作して少年の画像を創り出している、という現象をなぜか頭の隅では否定していたからだ。

彩内院は目の前にあるコレは意思を持つ独立した個体であるのではないか、と感じていた。

「彩内院 塔哉、僕は命ある“いきもの”ではない。だから命ある色も持たない。でも彩内院 塔哉がゴールに辿り着いたことで僕にある種の意味が生まれてこうなったんだ」

「予想外の答えだ。よくわからないけど、それ以上の説明ってしてもらえるのかな？」

「残念だけどそのことに関して僕が彩内院 塔哉に言えるのは、これくらいだよ」

「そうか。それじゃ質問を変えよう。何でそんなに僕の名前を呼ぶのかな？」

少年がドアを指さした。

「彩内院 塔哉の名前は、なくなっちゃうからだよ」

「……え？」

彩内院が固まった。

「なっ、なんで人を助けるくらいで名前がなくなるのかな？」

「だってそういうものだから。彩内院 塔哉は鍵を開けたから取り消しはできない。そしてドアの向こうに行けば名前がなくなる。だからここに辿り着くまでの間、僕らはその人の名前をできる限り呼び続ける。名前を失うことはその人自身を失うことだからさ彩内院 塔哉」

ドアの向こう！後！（前書き）

次第に見えてくるものを直視できますか？あなた、
正体注意ですよ！

ドアの向こう！後！

「……？」

頭の中を整理すべく、彩内院は握っていた眼鏡を胸ポケットに入れて、また床にあぐらをかいた。しばらく両手を顔に押し当てて目を閉じていたが、やがて大きくため息をつきながら顔を上げて少年に頬笑みかけた。

「ところで君は僕がレインのことを口にしたとき『彼は嘘つきじゃない』って言ったよね？ 彼もここにきたことがあるとは言ってたけどレインのことを知ってるの？」

いきなり何事もなかったかのように違う話を持ち出してきた。いわゆる現実逃避である。

少年は彩内院に気付かれぬように、ふっとそらした顔を曇らせた。「彼が入ったのはココであってココじゃない。世界はつながっていて僕らは世界中どの言葉でも話せる。すべてがただのお遊びにすぎないんだ」

「急に何言ってるのかな？ “僕ら”って、一体……？ それに世界中って言うからには、やっぱりレインが日本人じゃないって意味かい？」

遠い目になった少年の顔は忌まわしい記憶を呼び覚ましているようにで苦痛に歪んだ。

「そう。彼は……彼は僕が欲しくなるほどに綺麗なグリーンの目を持っていた……」

「え？ レインの目は真っ黒だったはず。じゃあ、カラコンかな？ そういえば自分で名前を付けたって言ってたけどレインは本名じゃないってこと？」

「いや、そうであってそうじゃない。名前はひとつだからね。つまり彼も彩内院 塔哉、君と同じくこうやって最後のドアまで辿り着いた過去を持っているんだよ」

最後の一言は、まるで汚いことのように言い放った。

「それって、どういう……」

「彩内院 塔哉、彼は言わなかったかい？ 『私はもしかしたら未来のあなたかもしれません』って。外で選ばれた人間を集めてくるのはそれぞれ理由は違うけど……みんな、ただの出来損ないの元人間なんだよ！」

快適隠れ家！前！（前書き）

時には思い出にふけることもあります。あなた、遠慮注意ですよ！

快適隠れ家！前！

「ねえねーえーレインってばー。どうしちゃったのー？ ぼーっとしてー。おなか空いたの？ 私のシヨコラーテーわけてあげよつかー？」

ソファーに寝転んで天井を見上げていたレインはシーナに顔をのぞきこまれて目を丸くしてから頬笑んだ。

シーナはここを隠れ家と呼んでいるが別に隠れているわけではない。ここは街並みの一部として自然に建っているただの家だ。ただし目に見えるからと言って誰でも入れるわけではなく、見えない力に守られて“見える隠れ家”としてそこに存在していた。

初めこの住み処は、一枚ずつしかない上着を入れるためのクローゼットと小さな箱だけが備えられた空っぽの人形の家だった。

クローゼットはひとつしかない出入り口に置かれていて、家に入っている間コートとマントは入れっぱなしになっている。その中で行いが悪いと丈を少し短くされていて、その逆も然りとなっているのだ。

小さな箱には毎日決まった数だけ無色透明のカードが入っている。その日の分を使い切ると次の日にまた同じ数だけ補充される仕組みになっていた。

世界中にある隠れ家はこの最低限の装備だけで用意されていた。食えず眠らず疲れず時間も流れずという体のイキモノには、それ以上の物は何もいらないうことなのだ。

だがここに例外が存在する。

ソファーにテーブル、本棚に冷蔵庫まで揃っている家。電気まで勝手に引いている。それどころか水道管までつなぎ水まで自由に使っているのだ。そのために各地で少しずつパイプやコンクリート、廃材が消えることとなった。

要するにシーナのわがままとレインの働きによって快適この上な

い隠れ家が出来上がったというわけだ。

「あー……今日は静かに話しかけてくれてレインさん嬉しいよ。この前おなかに飛び乗られた時はレインさん出ちゃいけないもの出すところだったからね」

食べなくてもいいのだから、当然おなかが空くという感覚も存在はしない。レインはシーナの言葉をやんわり受け流した。

窓際にいたジャックが露骨に顔をしかめている。

「嫌なこと言うなよなー。俺様想像しちゃったぜ」

レインは背伸びをしながらまた笑った。

快適隠れ家！中！（前書き）

わざわざ振り返らなくても過去は今の中にも生きています。あなた、心配注意ですよ！

快適隠れ家！中！

シーナが三つめのケーキに手を伸ばしながらレインを見つめる。

テーブルの上はこの日買ってもらったばかりのケーキと食べ終わったケーキの包み紙でいっぱいだ。シュークリームの受け皿だった銀紙も、すでに小さく丸められていた。

「じゃあお酒が足んないのー？ レインに限って眠いーとか疲れたーってこともないでしょー？」

レインは起き上がってシーナと向かい合わせに腰掛ける。

「そうだね、疲れてはいないよ。レインさん今日はそれなりに飲んだからアルコールも足りてるし。ちょっと昔のことを思い出してただけだよ」

それを聞いたジャックが、走ってきてレインの横に座った。

「いいなあ。レインは記憶があつて。俺様せつかく少し残ってたのに消えちゃったんだろー？」

「もう、レインさん毎回言ってるけど、記憶があればいいってもんじゃないんだよー？ ジャックは記憶なんかなくても今が楽しければそれでいいとは思わない？」

ジャックがきてすぐの頃は、本当にわずかだったが以前の記憶がありそれで苦しむことが何度もあった。それを知っているレインはジャックの記憶が消えたことを嬉しく思っていたのだ。

シーナが嬉しそうに口を挟む。

「そうそう。私、記憶なんか一切なかったけど、今が幸せだから幸せー！ 漫画おもしろいしーケーキおいしいしー！ それにレインも一緒にいるしー！」

大きく口を開けてケーキを頬張る。口のまわりはクリームだらけだ。

「ああ、そうだな。シーナは頭空っぽでここにきたからそんなになっちゃったんだもんなー。そもそも俺様に追い越されてる時点でダ

メダメなんじゃーん？」

「なーにー！」

いきなりフォークを投げ捨てたシーナがジャックに飛びかかった。ソファアーが倒れて二人の取っ組み合いが始まる。本当にただの小さな子供並みの元気だ。

その瞬間に、ひらりと飛んだレインはいつものように安全なところに避難していた。二人をすぐには止めずに目が届く場所で頬を緩めながらしばらく見守っている。

人間と造りが同じでも機能が違う分、丈夫にできているため滅多なことではケガをしないのだ。そして体力も常に有り余っている。

レインは三十分経っても飽きもせず、転がりまわる二人を見兼ねて引きはがした。放っておけばいくらでもじやれているし、好きなだけ暴れさせれば住み処が破壊されてしまうことだろう。

快適隠れ家！後！（前書き）

制御する側は冷静なものです。あなた、未熟注意ですよ！

快適隠れ家！後！

レインを挟んで起こしたソファーに並ぶ三人。この状態であればさすがに殴り合いはしない。

「あー、そうだ。昔のことと言えば俺様聞きたいことあったんだよ。俺様がくるまではずっと二人つきりだったのかな？　って」

レインとシーナが顔を見合わせる。

「あれ？　レインさんジャックに話さなかったっけ？」

「えへ。私覚えてないや」

「アホのシーナは黙ってる。俺様はレインに聞いてんだ！」

「なんだってー？　その口に銀紙入れちゃうぞー！」

「こらこら……あのねレインさん最初は独りきりだったの」

「ひとりじゃだー！」

寂しがりなシーナが拳を握っていきなり叫んだ。

レインが笑いながら、その頭をわしわしと混ぜてなだめる。

「大丈夫だよシーナ。すぐにもう一人増えたからね。それからレインさんとその子の二人でいろんなところに行ったなー。あっちにもこっちにも本当にたくさん……そしてここにきたときシーナも増えて三人になったんだよ」

何か考えている風のシーナがぼんやりつぶやいた。

「ああ、そういえばいたかもね、もうひとりー」

ジャックが嫌な顔をする。

「シーナって最低だな。一緒にいたくせに忘れちゃうのかよ。で？　そいつは今いないってことはどこ行ったんだ？」

レインが言い難そうに口を開く。

「あー……その子はね事故で粉みじんになっちゃったの。そのあとはまたしばらくレインさんとシーナの二人だけになって、ジャックがやってきたってわけ」

レインの両脇の二人が、すっかりおとなしくなり神妙な顔をして

いる。

「粉……」

「みじん……」

「そう。みんな不死身じゃないんだからね？ レインさんこれ以上死体を見るのはごめんだよ？ ちなみにシーナがあんまり覚えてないのは、その子とほんの少ししか一緒にいなかったのとレインさんがシーナに一切現場を見せなかったっていう両方のせいだね」

ジャックとシーナが現場を思い浮かべて同時に身震いをする。レインはそんな二人を見下ろして両手で、ぎゅうつと抱き寄せた。

「はい！ 怖いならそうならないようにすることー！ 二人ともわかった？」

「お、おう」

「はい、もちろーん！ じゃあもう一個ケーキ食べていい？」
スプラッターな画面を想像した直後にケーキを食べているシーナを見てジャックが、おえつとなっている。

「俺様がもし何か食べてたら出ちゃいけないものが出てくるとこだぞー！」

「あー、レインのまねっこだー。どうせジャック何も食べないんだから出てくるものなくてよかったじゃん」

「俺様だつてたまには何か食べることもあんだろー？」

「シーナがここぞとばかりにニカツと笑って“めめーぞん”の宝石タルトを差し出した。「じゃあ食べる？」

お持ち帰りの箱にはお目当てのシヨコラ・オー・キャラメリゼを初め、真っ白なチョコとチーズムースでできた定番商品のアンジェラまでぎっしり詰まっていたのだ。当然の如くシーナは、明日は買ってもらったのを我慢しなさい、とレインにしっかりと注意されていた。

「。□！」

丸ごと母がたっぷりのタルトは血と肉片を連想するには、もってこいの一品だ。

声にならない悪態をつきながらジャックが逃げていく。それを見

ながら満足げに母の宝石箱にかぶりつくシーナ。

レインは、そんないつも通りの二人を見て幸せそうに笑顔を見せるのだった。

見えてくるもの！前！（前書き）

耳を疑うようなことは何処にでも転がっています。あなた、逃避注意ですよ！

見えてくるもの！前！

「え？ 出来損ない？ 元人間ってどういう意味なんだい？ 君S Fの見過ぎじゃないかな？」

「だからそのままの意味で出来損ない、だよ彩内院 塔哉。ドアの向こうに行ったら人助けをするんだけど、極稀にその役目を果たせない出来損ないが出るんだよ」

出来損ないという単語と、自分にこれから起こることの関係を探るが、今の時点の彩内院にわかるはずもなかった。

少年が先を続ける。

「そういう人間は最後のドアを越えているから元の暮らしには戻れないんだよ彩内院 塔哉。さらに誰かを助けるためにその人生を失っているわけだから人としても終わってるってことなのさ」

「そういうのって一体……あ、そう言えばトップだか上司だかがいるって言ってたけどその人ってこの建物にいるの？」

驚いて目を忙しく動かし始めた少年に少し白っぽさが戻ってきた。

「彩内院 塔哉、それ彼が言ったのかな？ なんだか彼はいらないおしゃべりをするようになったみたいだね。昔とは大違いだよ」

またも気になる一言をもらって質問が枝分かれしていく。

「大違い？ 昔の彼って？ かなり陽気だし強いし元気だし。それに大きいし、あ！ 彼は無口なバスケの選手だったとか？ そのほうがマフィアよりずっと平和的だよな？」

（平和的？）

「そうだね彩内院 塔哉。それだったらどんなによかったかって僕も思うよ」

唇を噛み締めた少年はひとつひとつの言葉を地面に冷たく落下させていく。

「彼は……あまりに人の道を外れた、その残酷、残虐、残忍さから、

悪魔にも恐れられる男と言われ、歴史に名を残すことさえ、許されなかった……人類史上最凶悪の……殺し屋だったんだ」

マフィアみたい、とは言ったものの彩内院の頭に浮かぶレインは、いくら何でもその言葉からは遠くかけ離れたイメージだった。

「そんな！ そんなのおかしいじゃないか！ だって僕みたいにここにきたってことはレインが誰かを助けようとしたってことなんだよね？ ありえないことじゃないか」

「そうだよ。もしかしたら彩内院 塔哉がレインと呼ぶ男は、あのときからすでに人ではなかったのかもしれないね」

「……」

シヨックのあまり無言で返す。

見えてくるもの！中！（前書き）

他人の手を借りて進むのも、ひとつの手段なのです。あなた、知覚
注意ですよ！

見えてくるもの！中！

「さてと、ところで彩内院　塔哉は、まだドアを開けないのかな？」
「ちよつと、そんな意味深なこと言われて聞き流せると思うのかい？」
「あー、そうだ。それにまだこの組織のトップが何とかって話も言いかけたままだっただろ？」

「彩内院　塔哉、君つてもっとずっと単純なんだと思ってたよ。予想外だね」

「ああ、それはいい意味として受け取っておくよ。それで？」

「じゃあ彩内院　塔哉、この世界は誰が創ったものだと思う？」

彩内院は今まで世間で見聞きしてきたこととアンケートの一文を思い浮かべた。

*あなたは神の存在を信じていますか？

それに対する答えとは……。

「そりゃー神様でしょ！」

その言葉に、少年が意外な顔で口を開きかけたとき彩内院が残りの言葉をつないだ。

「……って答えるのが一般的なんだろうけど。それもおかしい話だよ。僕に言わせれば、どうして人はそういう話を作って信じたり信じさせたりってことを真剣に繰り返してるのか本気で理解できないからね」

少年は「あ」という口のままで彩内院の顔を見つめる。

何かのスイッチが入った彩内院は、取り憑かれているようにしゃべり続けた。

「だってバカみたいじゃないか。どうして神様つてやつは僕らと同じ姿をしているんだ？　なぜ自分の種族を中心に世界ができていると思うんだ？　あれって信じるものは救われる、じゃなくて自分が弱すぎるから何か拠り所になるものに責任を押し付けて、すがって頼って泣きついてってやつだからね。この世界は誰が創ったか？

その答えはどうでもいい。だよ。それに理由を付けるから人はどんな愚かになっていったんだ」

「……」

少年が目を丸くして流暢に話す彩内院をまじまじと見つめた。

「彩内院　塔哉、君つてもつとずつともものすごく本当に浅はかで、何も考えられないただのふざけた頭空っぽの大馬鹿なんだと思っていたけど実は違ったんだね」

「ちよつと……そこまでいくとむしろ清々しいよ。ところで今の質問に答えはあるのかい？　口の達者な少年」

何かを思いついたように彩内院の目の奥深くをじつとのぞきこんだ少年は、ハッと息を呑んだ。

そして納得したように深くうなずいてから、ふわっと天使の頬笑みを見せた。

見えてくるもの！後！（前書き）

ほんの少し視点を变えるだけでいいのです。あなた、位置注意ですよ！

見えてくるもの！後！

「もちろんさ。答えは、僕らのトップと言われる存在であり、“君ら人間が”勝手に神なんて位置づけてしまった存在、だよ彩内院塔哉」

「えっ？ 冗談だろ？ 神なんているわけじゃないか。僕は見えないものは信じない主義だからね」

「うん、彩内院 塔哉、人間たちが思っている神様っていうのとは少し違うんだよ」

両手を広げて優しく言葉を繋いでいく。

「この世のすべて、空に浮かんでいるように見える太陽、吹きつける風、咲いている花、泳ぐ魚、闘う獣、そして人間。世界のすべてがただのおもちやなんだよ。特に人間はすべてを勘違いしている質の悪いおもちやだね」

急に無表情になり黙りこくる彩内院。こんなことを言われても普段のようなおもしろいリアクションが出るでもない。それどころか、かえって冷静になって頭を回転させ始めた。まるで日頃全く使われていなかった部分が今までの遅れを取り戻そうとしているかのようだ。

少年も何も言わず、ただ微笑みながら彩内院のまわりをふわふわと音もなく歩き出した。

五分ほどして彩内院は、ふいに楽しそうな顔になり少年に目で訴えた。それに気付いた少年が足を止めて彩内院の目の前にしゃがみ込む。

「そうだね。僕はそんな馬鹿な、とは言わないよ。自分でも不思議だけど本っ当に漠然と、うつすらその感覚がわからないでもないんだ」

そして少年に見上げられながら、ゆっくり立ち上がって胸を張り背筋を伸ばした。

胸ポケットから眼鏡を出し、しっかりとしてから目の前のドア部分にふれる。

「もう行くよ。人間が踏み込んではいけない領域に踏み入ることがどういうことなのか、僕は世間を見て嫌になるほど知っていたんだってことを思い出したからね。それじゃ……」

ドアノブに手をかけ力を込める。

少年もその後ろに静かに立つ。

音もなくドアが開かれ薄暗い部屋の中に溢れる光。

“彩内院 塔哉”がその光に向かって大きく一歩踏み出した。光が当たって白くなった少年が決心したように拳を握る。

「彩内院 塔哉！ 彼は誰かを助けようとしたんじゃない！ 知っていたんだ。この世界の仕組みを。そしてこの世界ごと“神”を破壊しようとしていたんだ！ 彩内院 塔哉、君は彼に……！」

少年は振り返らないまま光に飲み込まれていくその背中に向かって、最後にもう一度だけ名前を口にした。

「……やっと会えたんだね。彩内院 塔哉」

98年前！前！（前書き）

！
すべてのことには経緯が存在するのです。あなた、暴発注意ですよ

98年前！前！

九十八年前　フィンランド大公国

白銀の世界に映えるであろう燃えるような髪と魔力を宿しているかのような緑色の瞳。その手には特製ダブルアクション・オート“アイデア”と“ゾルゲ”が握られている。どちらもこの時代の技術で作れるとは思えない出来ばえだ。

足まで隠れる黒いマントが爆風に煽られて、ゆっくりとなびく。
「答える。この主は、どこにいる？」

歩く武器庫は地の底から響くような声を発しながら立っていた。そこから一歩だけ踏み出した足が床に散らかった木片を粉碎する。

ブーツナイフと仕込みナイフ、予備の弾から、セラミック合金まで仕込まれた、信じられない重さのブーツが鈍く光を放った。

「君が何を言っているのかわからないよ。アレキサンダー・カールソン。その前に僕らの部屋をこんな目に遭わせた理由が聞きたいね」
余計に小さく見える少年は冷静に答えている。

「その名を口にするのは止める。それよりも早く奴の居場所を吐け。お前にはわかつているはずだ」

大男は、ゾルゲをまるで羽ペンか何かのように少年に向けて構えた。普通の人間なら撃った反動でその手の骨を砕いてしまうほどの威力を持つ主力の銃だ。

「アレキサンダー・カールソン、君はそんなもので僕を殺せると思うのかい？　ところで君の後ろに見えているのは原形をとどめていない僕の仲間だったものに見えるんだけど気のせいかな？　アレキサンダー・カールソン」

部屋いっぱい立ちこめる硝煙、壁とドアだったものの残骸、無数に放たれた火薬の臭い、そしてすぐにそれとわかる鉄くさい臭い。闇のコートからは赤い水が滴り落ちて水玉の道標を残していた。

「はっ！　お前を殺す？　馬鹿を言うな。見せかけだけのゴミが。」

俺が狙っているのはお前の後ろにあるクソみたいなドアだよ」

「えっ……？」

慌てて振り返った少年は驚きと体験したことのない恐怖に目を見開いた。

「そっ、そんな！ 嘘だ！ そんな馬鹿なことがあるはずない！
どうしてアレキサンダー・カールソンにドアが見えているんだ！

しかもこんな目の前に！ そんなことは不可能だ！ アレキサン
ダー・カールソン！ 君は一体何者なんだ！」

透き通った白い肌に、血も凍るような笑顔が浮かび上がった。

「よく聞け。俺は奴との遊びに飽きた、ただの失敗作。そしてこの
クソみたいなお遊びを終わらせるためだけに存在しているつまらな
い捨て駒だよ」

「そんなんっ……！ どうしてっ？ やめてくれアレキ……！」

！

98年前！中の上！（前書き）

その力と引き替えに失ったものもあります。あなた、要求注意ですよ！

98年前！中の上！

爆音……轟音……飛び散る破片……辺り一面に広がる眩い光。

「おいガキ、お前には守るものなどないはずだろう。主の居場所を吐け。それともこの先でもずっと同じことを繰り返してほしいのか？」

少年がゆっくり周りに目を向けた。滅茶苦茶になってしまった自分の空間が未だ残る煙に包まれている。ルールをすべてぶち壊され秩序などどこかへ行ってしまったことを知った少年は受容量を越えたショックで言葉を失っていた。

「今の俺は最強だ。終わりのない世界の中でやっとこんな力を手に入れることができたんだからな。知ってるか？俺のあとには血の雨しか降らないんだとよ！笑えるじゃないか！ブラッディー・レインだぜ？」

背筋を凍らせる不気味な笑顔。

想定外の事態に直面した少年は、すいっと大男の足元に近寄ってその顔を見上げた。

「……それだけのことをしてきてもアレキサンダー・カールソンはとても綺麗な目をしているんだね。そのまま……この世のすべてを消すまで止めないつもりなのかい？」

男は首を動かしてもせずに、ちっぽけで真っ白な少年を見下ろした。答えはなく無言のままだ。

「アレキサンダー・カールソンは、そんな目を持っているっていうのになんで……？目的は何だ？そのきれいな体に、しみ込むまで血を浴び続けて世界中を恐怖のどん底に突き落とすことで一体何を得られるって言うんだ！」

またも返事はない。冷ややかに、ただ見下ろすばかりだ。

「そのうえ君は……ドアを見つけて道を作ってしまったせいで、アレキサンダー・カールソンではなくなってしまうじゃないか！取

り返しのつかないことをしてしまったんだぞ！ アレキサンダー・カールソン！」

大男が銃を持ったままの両手をバツと広げた。勢いでコートに吸われていた紅いしぶきが散る。

「おいおいおい、くそガキ……お前は一体何を言っているんだ？ この世界は丸ごと生きているドールハウスじゃないか！ お前だつてただのゲームの駒のくせに。ほら！ この世界のどこに取り返しのつかないことがあるって言うんだ？ 言ってみるよ！」

へなへなと力なく少年がへたり込んだ。

「何で君がそんなことを知っているんだよ。だけどそこまでわかっているのなら理解できるはずだ。この世界でそれを否定したらすべては意味を成さなくなり君たち生物の存在意義が……」

98年前！中の下！（前書き）

なぜそこまでして型にはまろうとするのですか？あなた、分類注意ですよ！

98年前！中の下！

男は人の血が通っているとは思えないほどに冷酷な表情でそれを遮った。

「そんな姿のお前にもわかっていないはずだ。始めから存在意義なんてものではない。世界は奴の手の中で創られ試され変えられ観察され壊され捨てられ遊ばれ続けた！そしてそのサイクルをきっかり五〇億年の周期で馬鹿みたいに繰り返しているだけだっということがない！」
少年が頭を抱えて叫んだ。

「やめろ！ やめてくれ！ なんてなんだ！ アレキサンダー・カールソン！ もし、あの方に知られてしまったら君は……」

「人間どもは、そのサイクルの中で少しずつ残ってしまう過去の記憶に“予知”や“既視感”といった言葉で説明を付けて特別な力だと勘違いをしていやがる。そして奴のお遊びで駒の位置が換えられたとき“予言は外されて”しまうこととなるんだろ？ そうだよ、俺はすべて知っているんだ」

「なぜだ！ 君は、アレキサンダー・カールソンは人間じゃないのか？」

男は高らかに笑い声を立てている。だが少年はその笑顔に恐怖しか感じていなかった。

「そうだな。石ころだったことも牙を持つ獣だったことも水の中を這い回る虫けらだったこともあるさ！ だが今の俺はすべてを破壊する力を持った、真実を知る真正正銘の“生き証人”だ！」

少年は震えだした。これが人間ならその顔は真っ青になっているところだろう。

「どういう意味なんだ？ この僕に理解できないことがあるって言うのか？ ここにいる僕にアレキサンダー・カールソンが何者なのかわからないっていうのか！」

混乱する白い小動物の脇を通り抜けて最後のドアがあつた部分に

足を踏み出す。

「ここにくればちょっとはまともなことが聞けるかと思ったが見当違いだったようだ。その体のおかげで命拾いできたんだから創ってくれた奴に感謝するんだな」

「ア……アレキサンダー・カールソン、君はこの先に行く気なのか？」

「当然だ。ここにいたって時間の無駄だからな。と言っても時間は無限にあるのだからその表現も正しくはないのだろうが」

少年が怯えながらもゆっくりと立ち上がった。

98年前！後！（前書き）

簡単に望みますが、それがどういふことかわかっているのですか？
あなた、自己注意ですよ！

98年前！後！

「ドアを越えたらアレキサンダー・カールソンは消えてしまっよう？」
大男が動きを止めた。素早く少年の顔を振り返る。

「ほう？ あと一歩踏み出せば消滅するっていうのか？ おもしろい」

「そうだけど、そうじゃない。その空間に入れば名前が消える。さらに進むことですべてが消える。だからもし……」

「おい、俺を消すことができるっていうんならやってみろ！ それが本当の話なら俺は喜んで消されてやるよ！」

「そんな、何言ってるんだ！ 君はわかっていないんだアレキサンダー・カールソン！ 本来ここは選ばれ認められた者だけがくる場所。それなのに君みたいな……」

少年の言葉は、ことごとく遮られてしまう。

「おい、くそガキ、生きていく中で一番の不幸は何だと思う？」

「アレキサンダー・カールソンは、命を持たない僕にそれを聞くの？」

無言で答えを待っている。

「……わかったよ。その答えは、どうやって知ったにせよ知ってはならないことを知ってしまうこと。それが一番の不幸さ」

大男がまた笑い出した。不自然なほど大声で、それでいて小さな少年を嘲るように。

手慣れた様子で背中と足のホルダーに武器をしまう。

「もしも、生き物にこの世が生まれて以来すべての記憶が残っているとしたらどうだ。最初の五〇億年、次の五〇億年その中で生まれて消えてまた創りかえられて消えて、それを延々繰り返す。出会い、別れ、天災、自分が生きる上で関わった出来事すべてが頭に残っているとしたら？」

少年は言葉を失った。そんなことがありえるのか、すべてを任さ

れているはずの自分に理解できないことがあつてたまるか、人間に許された力をとうに越えているこの男は何なのか……少年は有るまじきことに、この世に存在して以来初めて“消えてしまいたい”という思いに襲われていた。

「よく聞け、くそガキ。その答えは『何ひとつ忘れることができないのが一番の不幸』……だ」

アレキサンダー・カルソンはそうつぶやくと初めて悲しそうな顔を見せ、最後の空間に足を踏み入れた。

その白い空間！前！（前書き）

その一歩は勇気がいります。自分で踏み出すのですから。あなた、
決断注意ですよ！

その白い空間！前！

ドアが閉まったのを確認した青年はドアだった物が白い壁に溶け込んで消えていく様子をただ静かに眺めていた。

白一色の部屋。見回す限り何も置いていない。照明は一切なく、壁や床といったこの場所を形作っている物が眩しく感じるほどに白く光っていた。

全部が光を放っているせいで錯覚を起こしそうだが、よくよく見ればちゃんと壁の一部に大人が余裕をもって通れるほどのシンプルな通り道があげられていた。

（ここは何なんだ？）青年は、そのまま通り道に近付いていった。隣を見てみると同じように何もなくてただ白く光を放つ部屋があるだけだ。

他にどうすればいいのかわからないため取りあえず隣に行こうと思いついたその時。

「ちょっと待つて」

頭の上から澄んだ雪の結晶のような声がした。青年が足を止めて上を見るが誰もいない。スピーカーらしき物もなく壁から床からその部屋すべてがつつるつるすべすべになっていた。

「おい、誰かいるのかい？ いるなら僕にどうすればいいのか教えてくれないかな。説明も目印も何にもなくて困ってるんだよ」

美しい声が即座に答える。

「ここにきたということ、あなたが『あなたで人を助ける』ことを望んだという証です。ところで、あなたは自分の名前が言えますか？」

「そんなの当然だよ……」

と言ったつきり言葉を失った青年の顔が固まった。しばらく眉をしかめ頭をひねっていたが急にパツと明るい顔になって胸から財布を取り出す。

しかしそこに入っていた名刺は名前のところだけが空白になっていて青年は無言でそれを元に戻した。

「……そっか、こういうことか。なくすのは名前だけなんだね。ひとまず記憶があつて何よりだ。そうでなければいきなりこんな状況になったらパニックを起こしかねないからね」

青年は冷静だった。

「はい。でもそれも今のうちだけです。次の段階ですべて消えてしまいますから。残っている記憶も全部」

その白い空間！中の上！（前書き）

目の前のことしか見えていないのではありませんか？あなた、死角
注意ですよ！

その白い空間！中の上！

答えが見えているにもかかわらず青年は思っていることをわざわざ口に出した。

「そうか、じゃあそのすべてを消したくないならここにいればいいってことだな。次に進んだりしないでさ」

そして悲しそうに下を向いて微笑んだ。

「それは個人の自由ですからもちろん構いません。ただ未来永劫ここにすることになる、というだけのことです」

青年は顔を上げた。その目には涙がうつすらと浮かんでいる。コートポケットに両手をつ込み、真つ白な少年に対して自分が答えたことをもう一度思い返して、それでも答えが変わらなかったことに安心した。

青年は本当になくして困る物が思いつかなかったのだ。金も仕事も家族も、自分さえも。

「僕は死んでしまうのかい？」

涙が頬を流れ落ちたが青年は悲しいわけではなかった。悲しみどころか喜びを感じていたのだ。

「いいえ。それは正しくない表現です。あなたは世界を形作るものの素材となつてマイナスの部分に補充されるという仕組みになっているのですよ」

「つまり？　僕がお金や食べ物に変身するってこと？　僕は粘土細工じゃないよ」

「今のは半分ほど正解です。ここにくる選ばれし素材は、目的に合わせて加工されます。世界はすべてつながっていて……あなたがさっき言った粘土細工と同じです。粘土の種類と色を使い分けて街や生き物を創ったとしましょう。それらはひとつひとつみんな違う物であり違う形であり、そして……すべて同じ力によって生み出された同じ粘土です」

青年が微笑んだまま話を引き継いだ。

「そしてその粘土の生き物は自分が誰に創られたのかを知らず我が物顔で生きていて、創り手はいつでもそれらを好きなように作りかえ、並べ替えて遊べるっていうわけだろ？」

「その通りです！　つまりこの世界は丸ごと生きている『ドールハウス』なんですよ。以前そう呼んだ方がいらっしやいました。でもこのプラスマイナス〃ゼロというバランスルールは今回新しくできたもので……」

ハッとして真顔になった青年の頭に（やっぱり）という気持ちが膨れ上がった。どうしようもないことを知りながらも、ため息をついて自分と同じ種族の愚かさを心から呪った。

その白い空間！中の下！（前書き）

あるべき姿を見失っていませんか？あなた、姿見注意ですよ！

その白い空間！中の下！

青年は黙って話の続きに耳を澄ませる。

「……人間たちが自我に目覚めて暴走を初めたせいで世界のバランスが崩壊しました。人間ばかりが増え続け、さらに何かをなくして何かを生み出すのルールが完全に破壊されました。そしてあの方によつて、もう今回のサイクルで修復はできないと判断されたのです」
両手で頭を抱えた青年が言葉を吐き出す。

「わかるよ。今、君が言ったのは人間のエゴで絶滅危惧種と勝手に名付けたものを下手に守っているアレとか、その他もろもろの話だろう？」

「まさにそうです。人間はとんでもなく迷惑なことを正義を振りかざしながら行います。ひとつの例をあげれば何かが絶滅したあとには違う何かが生まれるのに、それを邪魔していることで新しい物が生み出せなくなった、ということです」

「ああ、それに手を出してはいけない領域にまで踏み込んだからな。クローン技術は神の領域を侵す、なんて言うのも本当にそのままの意味でタブーにふれたんだろ？」

「その通りですよ。そういうわけで、もう今回のサイクルは見捨てられたも同然の扱いなのです。それでも残りの数億年、せめて次のサイクルに行くまでは世界を保たせようということで、ここは創られたのです」

定期的に起こる戦争や火山の噴火、洪水、大地震などにはすべて理由があつたのだ。

増えすぎた人間を減らすこと、自分より大きな力が動いていることを人間に思い出させること、そしてその様子を見て楽しむ者がいるということ……。

「素材……か。僕みたいなのは一体何になるんだい？」

「そうですね、結果がどうなるかはわかりませんが、今回は土台の

栄養になる予定です」

「土台っていうのは地球のことかな？ 地球に僕というごはんを食べさせるってこと」

「はい。“地に生まれた者は地に返す”のルールを壊してしまったせいでどうなったかはご存知のはず。人間のおかげで地の栄養はなくなる一方ですから」

一番に青年の頭に浮かんだのは人間が始めた「火葬」のことだった。

「そして地に生まれた僕は地に帰れるってわけか。何かちょっと安心したよ」

その白い空間！後！（前書き）

命あるものには必ず終わりがくるのです。でもそれは・・・。あなた、輪廻注意ですよ！

その白い空間！後！

「それはよかった。心の準備ができたら次の部屋にどうぞ。そのまま隣の部屋にいるだけで自動加工されます」

コートのポケットに両手をつ込んでしばらく立ちつくす青年。

「ねえ、ここも“世界はすべてつながっている”なの？」

「ええ。そうですよ。あなた方が現在、過去、未来と呼ぶすべてが、生物、国、宇宙と呼ぶすべてが、ひとつの世界としてつながっているひとつの物なのです」

「……変なことを聞くけど僕がここにきたのは初めてなのかな？」

「初めてであり、初めてではない、ですよ。その答えは、もうわかっているではありませんか？」

「はぐらかされた気分だよ。まあいいか。いくら聞いたって消滅するんじゃないもんね」

手を出して壁にふれてから前を向いて歩き出した。

次の、部屋へ。

同じような白い空間に入るなり入り口だった穴が消えて壁になった。

部屋中に静電気の塊が充満しているようなピリピリとした熱を感じる。

青年は見た目は同じでも違う空気を感じ取って思わず自分の腕を抱いた。

「ねえ、まだ僕の声が聞こえるのかな？ 聞こえるなら……」

返事は即座に降ってきた。

「聞こえていますよ。最後までお見送りするのが役目ですから」

（お見送りって）葬式をイメージしてしまい青年の気持ちさがザワツとした。

「えっと、それじゃ……」

「痛みは感じませんよ。今までもよく聞かれました。その証拠に、

何も感じないでしょう？」

青年は思わず自分の体を見回し、顔から足までさわれる限り手をふれてみた。

「それじゃ、もう加工され始めてるってこと？　せめて気を失ってからくらの気遣いはないのかな？　さすがに自分がぐちゃぐちゃになるのなんか見たくないよ」

笑っているのか、カラコロと白い少年が発したような音が聞こえた。

「大丈夫です。ほらよく見てごらんなさい」

コートも靴も指先も体中が粉状になって崩れ、見えない風に巻かれるように舞い上がっていく。

「うわぁ……」

青年は本当に痛みがないので冷静に消えゆく体を見つめていた。まだ意識があるおかげで、体だけではなく心までが軽くなっていくのを感じ取っていた。

重力なる物も存在せず、足はとうに形はない。それでも消えゆく段階の胴と頭は宙に浮きながら崩れている。

そしてついに青年のすべては跡形もなく散ってしまった。

（そうか……こうやって、世界は創られ……）

………

残されたもの！（前書き）

いつもそう。いつてしまったものの本意はわからないままなのです。
あなた、残像注意ですよ！

残されたもの！

「お前たちはボディーガードのくせに一体何をやっているんだ！ あいつに何かあったときは責任をとれるのか？ 何のためにお前たちを雇ったと思っているんだ！」

息子が七才のときからボディーガードをつけることに決めた張本人だ。早いうちから息子に会社を譲ったため、まだまだ現役でもないけるほどの年だった。

子供がでずに“ある人物”から一人の養子もらい自分の子として育てた。つまりこれでこの会社は完全に跡継ぎを失ってしまうこととなったのだ。

「しかしボスは親しい知り合いと一緒になので問題ないはずです」

「私も同じ意見です。ボスはもう子供ではないのですから……」

筋肉隆々の二人は仁王立ちのまま説教を受けているが反省の色はない。

「何だそれは！ さっきからそれしか言っていないが名前も言えない知り合いがどこにいるんだ！」

二人はまた黙秘をきめこんだ。

「そもそも名前も知らずになぜ知り合いと言えるんだ！ ええい、もういい！ お前たちの処分は後で考える！ 覚悟しておけ！」

怒鳴るだけ怒鳴ってから、破壊せんばかりの勢いでドアを閉めて出て行く。廊下からの声も筒抜けだ。

『捜せ捜せ！ 全く当てにならん役立たずの警察でもないよりましだ！ 呼び出せ！ 総動員して捜すんだ……』

部屋に残されたボディーガード二人は顔を見合わせてため息をつきながら、やれやれとお互いに首を振った。

二人には自分たちの若きボスがもう戻ってこないことがわかっていたし、それが悪いことではないというのも承知していた。

「どこかに新しいボスでも捜しに行くかな？ お前はどつする？」

「特に予定はないからお前について行っても構わないぞ。お前といれば、またおもしろいことに巡り会うかもしれないからな」

「国に戻ってまた軍人はどうだ？」

「あんなことがあったあとでは今さら、だな」

互いに、ふつと顔が緩む。

「確かにそうだ」

ひび割れたままの窓。主をなくした部屋の中はいくつもの洋酒のボトルが転がったままだ。

ガラスのテーブルの上にボディーガードの証であるバッジとICチップ入りの入社許可証を二つずつ置き去りにして、二人はそのまま姿を消した。

その過去！結果（上）！（前書き）

そつですよ。小さなトリックに気付く必要があるんです。あなた、熟読注意ですよ！

その過去！結果（上）！

二十五年前（後）アメリカ合衆国

「俺たちが国のために命をかけたって結局残る物は何もないんだよな」

「ああ、俺も嫁さんに逃げられたしな」

「おい、またか？　しかし国に忠誠を誓うことに迷いはないが、たまに俺には何か違う生き方があったんじゃないかって思うことがあるんだよな」

「へえ？　お前もそんなこと考えると驚きだな」

「お前も、ってなんだよ」

「俺も思っているからさ」

「そうか。ま、思いたくもなるさ、ほん……」

「ねえねえ君たち、ちょーつといいかなー？」

「なっ、なんだ！　いきなり、貴様何者だっ！」

「動くんじゃない！　怪しい奴め！　どこのスパイだ！」

「ちがーうよっ！　レインさんが、そんな君たちに新しい生き甲斐を与えてあげよっかなって思ってたねー」

「何を言う！ 俺たちはこの国に忠誠を……」

「そっちこそ何言ってるの、ひよっ子ちゃんたち。それならこのレインさんを倒してみてよ。銃でも戦車でも核でも使ってさ。その忠誠心ってやつを見せてみてよ」

「なーにー！ 俺たちを誰だと思ってやがる！」

「食らえ！」

！……！

「う、嘘だろ？ こんな……」

「ク……ソッ！ お前は一体……」

その過去！結果（下）！（前書き）

未来とは“見える”ものではなく、その目で“見に行く”ものなのです。あなた、前途注意ですよ！

その過去！結果（下）！

「レインさんはね、君たちひよっ子にお願いがあつてきたの。国に尽くすのもいいけど、たまにはもうちょつと小さい物を守ってもらうのもいいかなーと思つてねー」

「ふざけるな！　どこの誰だか知らないやつと言つことなど！」

「そうだ！　何を言い出すかと思えば下らんことを！」

「ただでとは言わないよ。レインさんのお願いを聞いてくれるなら特別にレインさんがマーシャルアーツを指南してあげるよ！　言つとくけど世界最強だからひよっ子ちゃんたちにできるかどうかは、わからないけどねー」

「世界最強だと？　確かに、あんなに鍛えている俺たちが手も足も出なかったのは事実だ。しかし本当に強くなれるのか？」

「レインさんの強さがいい証拠でしょ？　ただし今から四年か五年場合によつてはもつと早い時期がタイムリミット。それまでに会得できたら守るべき物を与えてあげるってことになるんだけど。さあて、どうする？」

「どうするも何も俺たちは……」

「俺……やるよ！　その最強のマーシャルアーツを身につけたい！　頼む！　教えてくれ！」

「おい、お前本気か？　スパイかもしれないんだぞ？」

「かわわないさ！ 俺は強くなりたいし、それに……これがもしかしたら“違う生き方”ってやつなのかもしれないんだ」

「……」

「さてさて、君はどうするの？ レインさんとしては二人いっぺんが手っ取り早いけど無理強いはしないよ。だから自分で決めてね」

「……わかった。わかったよ！ その話、乗ってやる！ そしていつかお前にリベンジを申し込むさ！」

「レインさん嬉しい！ そうこなくっちゃ。君たちほどのオーラを持った人間は貴重だから、どっかの誰かに使われるのは嫌だったんだよねー」

その過去！原因（上）！（前書き）

当たり前が当たり前ではなくなることを想像できますか？あなた、
日常注意ですよ！

その過去！原因（上）！

二十五年前（前）日本

「事故だー！ 誰か轢かれたぞー！」

「ひでえな！ 何だったのかもわからないほどグチャグチャじゃねーか」

「あーいうのって誰が片付けるわけ？」

「身内が拾うらしいけど……これはひどすぎるだろ」

「でも台風きてるから勝手に掃除されちゃうんじゃないの？」

「ああ、確かに。雨なんか降ったら一発だろ……ほんとひでえな」

「……あれほど言ったのに……俺をまた独りにしやがって……大馬鹿野郎……くそ！ 何で雨なんか降らすんだよ！ 何でこんな……このままじゃ……ふざけんじゃねえ！ くそっ！ あああああああああ！ ちくしょー……！」

「おやおやおや、スペンサーじゃないか何十年ぶりかな。ちゃんとドアを開けてきてくれたことがまず嬉しいよ。仲間も生きているしね」

「うるさい！ お前に用はないんだ！ 俺はあっちに用があるんだよ！」

「ふーん、ところで手に提げてる“それ”何かな？ 懐かしい二オイだね。スペンサー、君はあのとき名前と一緒にすべてをなくしたはずじゃなかった？ まさかまた病気が再発したのかい？」

「黙れ！ こいつはカインなんだよ！」

「……スペンサー、今のは僕の聞き間違いかな？」

「カインだ！ カインなんだ！ “つながっている”お前は知っているはずだろ！」

「あー……それでスペンサー、君はそのカインだったものを持ち込

んでどうしようっていうのかな？ 一体どれだけ僕に未知の経験をさせれば気が済むんだい？」

「だからお前に用はないと言ってるだろう！ 今の俺は武器をなくした代わりに素手で壁もドアも破壊できることを知らないわけじゃないよな？ 話は終わりだ！」

「止めたって無駄なのも知ってるよ。スペンサーが何をしたいか知らないけど好きにするといいさ」

「当たり前だ。くそガキ！」

その過去！原因（中の上）！（前書き）

何かを強く願うのなら、それは容易いことなのです。あなた、強情
注意ですよ！

その過去！原因（中の上）！

「あらあら、スペンサー。その姿になってもここに帰ってくるなんて驚きですね。一体どうしたのですか？」

「こいつを……カインをもとに戻してくれ。あんたならできるはずだ。頼むよ……」

「頼む、ですって？ あなたの口からそんな言葉が出るなんて信じられませんね」

「うるさい！ やるのかやらないのか、どっちなんだ！」

「あなたに逆らうほどこちら馬鹿ではないのですね。やってみましょう。ただしどうなるかはカインの素材次第だということを忘れないでください。こればかりはこちらの管轄外です」

「かまわない。かまわないから……」

「さあ、袋のまま構いませんからそこに入れてあげてください。何ならその後であなたも入りますか？ もしかしたらリセットされるかもしれませんよ？」

「そうだな……カインが元通り出てきたら考えるよ」

「そうですね。では、しばらくそちらでお待ちください」

……

「……あの……非常に言いづらいのですが……少し、足りなかったのではないかと」

「つまり、なんだ？ 言ってみろ……」

「あの、完全に元通りには、ならなかったようです」

「だから何だ！ はつきり言……ちよっ、ちよっと待て！ 何だ！ この、コレは？」

「彼はもうカインではありません。力も失いました。彼はただの……」

……

「人間の子供じゃないか！」

「はい。集められた素材が足りなくて、この形にするのが精一杯で

した。すべてを失っているのももちろんスペンサー、あなたのことも忘れています」

「……悪夢だ。俺もリセットしてくれないか？ 今度こそ完全に消してくれよ。もう勘弁してくれ……」

「スペンサー気を落とさずに。そうですね。今度は消せるといいですね」

……

「まさかそのまま出てくるとは思いませんでしたよスペンサー。名前くらいリセットされそうな物なのに残念です。ああ、少なくとも体を濡らしていた雨や……えー、そのー、体に付いていたものは素材として使われたようですね」

「そうだな……雨か……。雨がすべてを洗い流してしまえばいい。とも思っただが俺には許されなかったな」

その過去！原因（中の下）！（前書き）

自分にできることがどれだけあるか真剣に考えたことがありますか
？あなた、相対注意ですよ！

その過去！原因（中の下）！

「おじちゃん、だれ？」

「！　しゃべっ！　おい、どうなってるんだ！」

「スペンサーあなたねえ、そのくらいの大きさの子供がしゃべって何の不思議があるんですか。そもそも元も今も人間ですし、その間に違う命としても生きていたのですからそのくらい当たり前です」

「そんなことっ……………」

「だれー？」

「ほら、答えてお上げなさい。あなたに話しかけているのですから。あなたの大事な人だったのでしょうか？」

「……でも、俺のことは覚えてないんだよね？」

「ええ、スペンサー。本当に残念ですが」

「そうか……おい、お前は俺がリセットされなかったと言ったな。それなら俺が自力でリセットするさ。その名は捨てる！　こいつだって生まれ変わったんだ。俺だって生まれ変わっても構わないはずだ」

「それはそうですが、あなたは自分を捨てても記憶が残るのでは？　前日もそうやって世界に抗うことを無理矢理にやめようとして苦しんだはずですよ」

「無理矢理じゃないさ。自分を消せると知って、疲れ果てていた自分を解放してやろうと思ったただけだ」

「そうですか。それはそれは……………それで？　あなたはその子と生きて行く気ですか？」

「いや、それはできないと自分でもわかっている。コレはコレの人生を歩めるようにするだけだ。人として生きて大きくなって、いつか一目でもその姿を見られれば、それで構わない」

「人間はあなたと違って弱いのです。それだと、あなたはまたこの子を失う姿を見ることになりますよ？　それに耐えられますか？」

「すべての記憶を持ちながら生き続けなければいけない俺に、くだらないことを聞くな。だが少なくとも普通の人間よりは安全に生きられるように俺の代わりを手配しよう。それくらいは許されるはずだ」

その過去！原因（後）！（前書き）

本当に気付いていますか？常に世界は変化し続けているということに。あなた、改革注意ですよ！

その過去！原因（後）！

「だっこー」

「なっ、なんだと？ それは俺に言ってるのか？」

「あらあらあらスペンサー、私は楽しくてたまりませんよ！ ほら、早く抱っこしてあげないと泣くかもしれませんがいんですか？ ちなみに私には抱っこなんてする力はないですよ？」

「くっそ……しょうがないな……おい、お前は人として生まれたんだからこんなところで訳のわからない奴からじゃなく、新しく親になるやつからちゃんとした名前をもらうんだぞ？」

「訳のわからないのは心外です。あなたは私を知っているのに、そんなことを言うのですか？ あなたにあげたスペンサーという名はとても素敵な名前だと自負しているのですが」

「それはもう捨てた、と言っただろう」

「おじちゃー？」

「な……違う！ お・兄・さん・は……お兄さんは……」

「わー？」

……

「レイン……お兄さんはレインって言うんだよ」

「れいーん」

「そうレイン。同じ雨でも穢れた物を綺麗に洗い流す清らかな雨だ」「おやおや、そうですね。わかりましたよ。あの名は捨てましょう、レイン。もう二度とここに帰ってこないように願っていますからね」

「ああ、世話になった。これでさすがに“神”共々ここを壊す気はなくなっただよ」

「ああ……やっぱり、まだ思っていたんですね」

「当然だ！ だがもう過ぎたことだからな。お前も忘れるがいいさ。じゃあな。ほら、お前もバイバイしろ」

「ばいばあい」

「はい、ばいばい。さよなら、レイン」

「レイン……あなたでもあんな顔ができるんじゃないですか。今度こそあなたが穏やかに暮らせるように祈っていますよ……」

加工されて！前！（前書き）

そして命はまた廻り出すのです。あなた、転生注意ですよ！

加工されて！前！

（眩しい……白い……何だ？　どうなってるんだ……）

「あらあらまあ！　これはこれはこれ！」

（え……何？）

「大丈夫ですよ。さあ目を開けて御覧なさい」

真っ白な壁と同じ白さの生き物が目の前にかがんでいる。上から下まで白く、服らしき布はふわふわと体に巻き付いて裾が広がっていた。

「えっと……あの……誰？　妖精？」

その言葉にカラコ口と笑いながら真っ白な手を差し出す。

青年が反射的にその手を握り返すと、見かけによらない力でそのまま引き起こして青年を立たせ、またカラコ口と笑った。

白い顔は青年の顔を見つめながら嬉しそうに微笑んでいる。

「あなたは自分の名前が言えますか？」

「え？　……えっと、いや、あの出てこないな」

（？）青年は何となく下を見て、自分が部屋と同じくらい真っ白なコートを着ていることに気付いた。

妖精は手をひとつ打ち鳴らしてにっこり頬笑む。

「はいっ！　よろしい。答えたらどうしようかと思いましたよ」

「あつ、あの、一体？」

「さあ目を閉じて。あなたに名前をあげましょうね。とっても素敵で特別な名前ですよ」

青年は首を傾げた。

すっつと息を吸いこんだ妖精が片手を自分の胸に、そしてもう片方の手を青年の胸に当てた。

青年が慌てて目を閉じる。

そっつと息を吐いてからキラキラの笑顔を見せてその名を呼んだ。
「カイン、あなたはカインですよ」

名前を呼ばれた瞬間、青年は雷に打たれたように体を震わせ目を見開いた。

「……ぼ、くは、カイン？」

妖精は白くて大きな目を輝かせながら服のフレアをふわりふわりと揺らしてはしゃいでいる。

「はい。そう！　そうですよ。こんなに楽しいのは何時ぶりでしょうか。あなたのおかげで私は希望が持てたのです。よく帰ってきてくれました。おかえりなさい！　カイン！」

カインは、しびれている体を少しずつ動かしてみた。

手、動く。足を持ち上げる。つるつるの黒い靴を履いた足、動く。試しに軽くジャンプを試してみた。

「おっとっ！」

天井に当たりそうになって驚く。

自分の体が思っていた通りに、動くことを確認してようやく妖精の顔を見つめた。

「なるほどね。今回の僕には記憶を残してくれたわけか。いや、戻してくれたというべきかな」

「さあ、どうでしょうね」

妖精はまだ楽しそうに跳ね回っている。

「では、改めて。やぁジュニ。ひさしぶりだね。あれからのくらい経ったんだろうか」

「それは人間の単位で？　どんな形でも、ということなら二十五年この姿でということなら九十六年ぶりですね！　私に名前を付けてくれたのもあなたですから、そうやって呼ばれるのも久々です」

カインが静かに頬笑んだ。

加工されて！中！（前書き）

覚悟というのは生きるものだけが使える強さですよ。死ぬ覚悟なんて存在しないのです。あなた、心魂注意ですよ！

加工されて！中！

「僕は名前をなくしたと思っていたんだがね。ジュニが気を利かせてくれたのかな？」

「私はあなたのおかげで、ここが破壊される心配もなく、レインのあんな姿まで見る事ができました。これはレインとあなたへのお礼ですよ。こんなこと、ここができて以来初めての事ですから特別です！」

頬笑んだカインは軽やかに舞い、もう一度改めて自分の姿を眺めてから安堵のため息をついた。

「昔よりコートが長くなつたのは気のせいかな？」
ジュニは頬が緩みっぱなしだ。

「いいえ。またひとつ成長しましたから。それとも、いい眼鏡をしていたのでその分、素材が余ってコートを長くしてしまったのでしょうか？」

そんな仕組みでないことを承知している二人は、思い切り笑った。
「でも本当は、あなたがあのまま素材として世界に吸収されてしまうのではないかと心配していました」

「心配？　なぜだい？　君はそれが仕事だし僕だってそうだったとしても何も困らないってわかったいるだろうに」

その言葉にフルフルと首を降る。

「というより、レインにご褒美を上げたかったです。世界の仕組みを知りながら、そしてすべての記憶を背負いながら、それでも生き続けなければいけないレインに」

ふいにカインの脳裏に列車に轢かれた時のことが蘇る。

線路に男が横たわっていた。わざわざ鎖で足をしばってレールに巻き付け鍵までかけていた。「いつかくる死が怖いからいつそ自分で死にたい」という不思議な理由でそこにいるのだという。

カインは、こんな愚かな人間を作り出す世界の仕組みを呪いながら、そんなことをしても無駄だと教えてやった。だが男は動こうとしない。

そもそもカインがそこにいたのは偶然で、目指す人間の近くに变な気配を感じて何となく見に行ったら男がいた、というだけだったのだ。

命の仕組みを知っているカインは無駄な人助けをすることなくそのまま立ち去ろうとした。

だが男は列車がくることに気付くと急に怖くなって叫んだのだ。「頼む！ 助けてくれ！」と。

加工されて！後！（前書き）

理屈よりも、もっとずっと大事なことがあるんです。あなた、実行
注意ですよ！

加工されて！後！

近くに駅はなくカーブもない場所。列車は最高速度のままで進みカインが男の元に駆け寄ったときにはすでに目の前に迫っていた。白い塊に気付いた運転手が急ブレーキをかけたが間に合わず、カインが鎖を力任せに引きちぎって男を投げ飛ばしたのと、その肌に金属の冷たさを感じ取ったのは同時だった。

そして最後の瞬間……

「レイン……ごめん」

と、つぶやいて記憶が途切れた。

粉々になれば意識はない。それは人間と同じだ。

次に目が覚めた時はカインではなくただの小さな子供になっていた。

だがこの事実に向面したレインがどうなってしまうのか、カインは見なくてもちゃんとわかっていた。

「ねえ、ジュニ、彼は、さぞ取り乱したんだろうね」

いきなり切り出したが何のことも痛いほど理解しているジュニは静かにうなずいた。

声に出さなくても、その顔がすべてを物語っている。

「そうか。本当に悪いことをしたな」

「そうですね！ だからこそあなたは一刻も早くレインを喜ばせるべきです！ 私たちは人ではないけれど彼は生きているんですから」カインは静かな笑顔で答える。

「さて、あなたのために出口を創るのはこれで三度目ですね」

泣きそうな笑顔のジュニが壁に手を当てるとその手を中心に穴が広がり道を創った。

「そうか、もう三度も……」

「そうですね！ もうこなくてもいいですからね？ くれぐれもレ

インを泣かさないようにしてください！ 彼が殴り込んでくるのは結構怖いんですから！」

カインは笑いながらジユニに手を差し出した。

「ああ、そうだね。気を付けるとするよ。これも二度目だね。さよなら、小さな創造主ジユニ」

手を握り返す白い笑顔がキラキラと輝いた。

「あの方が聞いたら怒りますよ。ああ、今度は“ばいばい”じゃないんですね。さよならカイン。あなたも幸せに」

時は来た！（前書き）

何をそんなに考えるのですか？世の中はうまくできているのです。
あなた、躊躇注意ですよ！

時は来た！

「！」

屋根に寝転んでいたレインが急に立ち上がった。その勢いで、レインのおなかに頭を乗せていたシーナとジャックが漫画のように転げ落ちて行く。

「あ、ごめ……」

ほんの数歩踏み出したレインが片手に一人ずつひょいっとつかまえた。

「レインひどいって……」

「なーにー？ どうしたの？ どこ？ 私見てないよー！」

レインは二人を屋根に下ろして真っ直ぐに立つと、そのままの姿勢でしばらく空を見上げた。

シーナとジャックは黙って顔を見合わせる。

世界のバランスを取るためにこの街では毎日三〇人以上連れて行つてはいけない、というルールがあるので夜まで動き回することは滅多にない。

この日は流れ星が見たいというシーナに付き合ってみんなで屋根に寝転んでいただけだった。

そもそもシーナがそんなことを言い出したのも「星が流れ落ちるまでに三回願いをかけるとそれが叶う」というのを漫画で見たからだっただが、何時間経つてもシーナだけ見つけれなかったのだ。「レイーン、ねーえ？ どうしたのー？ また見つけた？ 私も見たいよー」

ハッとしたレインが斜め後ろを向いてそのまま目を凝らしている。とつさに二人も同じ方向を見るが何も見えない。もちろんオーラを感じるわけでもなかった。

いきなりシーナがレインに飛びついて肩までよじ登った。それでも全く動かずに一点を見つめている。おかしいと思ったジャックも

同じように登ったが相変わらずそのままじっとしているままだ。

「……」

「え？ ジャック今、何か言った？」

「いや。俺様じゃないし、レインでもない」

それまで黙っていたレインがそつと口を開いた。

「そうか……」

「え？ 何が？」

「なになに？」

レインが何をしているかわからない二人はそれぞれ器用にしがみついて、レインの顔と自分の顔を並べてその視線の先に見開く。するといきなりレインは肩に二人を乗せたままで屋根から屋根へと飛ぶように走り出した。

「うわっ！」

「わーおー！」

自力でしがみついているだけではなく、二人の体はちゃんと大きな腕で支えられている。そのおかげでシーナとジャックは安心して夜の散歩を楽しんでいられた。

街は建物が密集しているので足場には不自由せず、レインは長い足で地面と大差なく走り続けていく。

本当の再会！（前書き）

流れる時間というものは、それぞれに違う重みがあるものなのです。
あなた、胸中注意ですよ！

本当の再会！

「ねーえ、レーイン。どこまでいーくのー？」

「シーナ黙れよ。舌かむぞ。聞かなくても着けばわかるだろ」

むうつとしたシーナがジャックを蹴っ飛ばした。

「うわっ！ シーナてめえ！ 落ちたらどーすんだよ！ 俺様を殺す気か？」

もちろんレーインがしっかりと握っているので落ちる心配はない。

「べーっ」

肩の上、しかもこの状況でも喧嘩ができる二人に構うことなくレーインは無言で走り続けた。

シーナはいつものように特に気にしていなかったが、ジャックはこんなレーインを見るのが初めてだった。これから起こることが怖いことだったらどうしようと言わんばかりにしがみつくと腕に、ぎゅううっと力がこもる。

ジャックが精一杯力を込めたところで高が知れているのでレーインは痛くも痒くもない。だが、その不安な気持ちはレーインにしっかりと伝わっていて、ジャックを支えながらも、ぽんぽんと背中をたたいてやるのだった。

レーインが街を半分横切ったあたり、ビルの屋上で足を止める。二人を乗せたままなのは、しがみつくと手が降りたくないと言っているのがわかるからだ。

凜とした風が吹き空気は澄みきっていて、それが街に残る雑音を遠ざけていた。

静けさの中、またひとつ星が流れたがシーナはこれにも気付かない。い。

空は届きそうなくらい近くにあって、世界が変形しているような錯覚を起こさせた。

三人ともしやべらない。

シーナが黙っているのは降りると言われたら嫌だから。
ジャックが黙っているのは、今のこの状況が全くわからないから。
そしてレインが黙っているのは……

「おかえり…… カイン」

何より先にこのひとことを言いたかったからなのだ。
ほんの一瞬の間を置いて、よく通る声が返ってきた。

「ああ、ただいま。レイン」

レインは目を閉じて聞き馴染んだ声を全身で受け取り、まさにこのとき時間の壁がなくなったことを実感した。

カインが立っているのはまだいくつかの部屋に灯りがともっている向かいの建物の屋上。少し前まで彩内院 塔哉という社長が経営していた場所だ。そこで何を思うのか…… 忘れられないことの辛さを知るレインはカインがその場所にいることに少しだけ胸を痛めた。

顔合わせ！（前書き）

いい関係というものは、
気付けば築かれているものなのです。
あなた、調子注意ですよ！

顔合わせ！

白い貴公子はコートをはためかせながら信号機の頭と電線をうまく使ってレインたち三人の前に着地した。

再会した二人が静かに笑顔を交わす。

「おや、シーナもいるんだね。こっちの彼は初対面だな。 “ 楽しく ” やっているようで僕も嬉しいよレイン」

「え……誰？ 私こんな人、知らないよ？」

「シーナ……君らしい答えをありがとう。君に漫画の楽しさを教えたのは僕だったんだけどね……」

レインはようやく二人を肩から降ろしてジャックを前に出した。

「カイン、この子はジャック。この新米さん。そして、この白くて長いコートのお兄さんはカイン。昔のレインさんの相棒だよ」

「お、おう」

「レインと名前似てるー。まぎらわしい。あ、私わかったー！ カインはあれでしょ？ 粉み……」

「！」

シーナが何を言おうとしているのかがわかったジャックは、さすがショートレンジ・ラリアートを食らわせた。

「ひゃいん！」

それを引き金に、また取っ組み合いが始まる。レインとカインは申し合わせたかのように、ひらつと飛び退いて避難した。

戦う二人から目を離さないまま、とばっちりを受けない距離を取ってコンクリートの椅子にレインが座った。カインはその横に立つ。白いコートを汚したくないという理由から外では基本的に立っているのだ。

片膝を立てて座るレインと、その半歩後ろで左側に立つカイン。これがこの二人の昔からのスタイルだった。

「懐かしい、というところかな？」

「いやー。レインさんにはほんの一瞬だよ。懐かしい、なんてないからねー」

「あー……レイン、君ってそんな風だったかな？」

「レインさんはレインさんのままだよ！　ところで君がここにいるのは、この街は四人でやって行くってことでいいのかな？　それともレインさんの顔を見にきただけ？」

楽しそうにカインが笑った。

「そうだね。とにかく君に会うことしか考えていなかったよ。でもよそが人手不足、なんてことになるまでは僕もここにいていいんじゃないかな？」

「そうだね。レインさんもそれがいいな。ジャックは仕事が楽になるって喜ぶだろうし」

ふっ、と頬笑む二人。

カインは静かにレインを見下ろした。闇色の姿は真っ黒な中でも際立って見える。

「ねえレイン、君はまだ……覚えているのかい？」

レインはその問いに前を向いたままで淡々と答えた。

「あー……レインさんも焼きが回ったもんだね。こんなことで世界のあり方を見過ぎすようじゃおしまいだよ。結局レインさんも奴の思い通りに動かただのおもちゃだったってことかな」

珍しくカインがしゃがみこんだ。きれいなコートが地面に敷かれている。

「ねえ、僕は君の過去を知らない。もしかしてレインにはどこか戻りたい時間や場所っていうのがあるのかな？」

目を合わせる二人。

「……レインさんの過去を知りたいってこと？」

「いや、過去を知りたいというよりは、レインがすべてを背負っている上で望む何かがあるんじゃないかなーっと思っただけさ」

（って、何を言ってるんだ僕は……）カインは自分が口にした言葉を残念に思った。なぜいきなりそんなことを聞いたのかもわからない

かった。

以前一緒にいた頃から多くを語らなくてもわかりあえた二人だが、過去やその深い部分に切りこむことは今まで一度もなかったのだ。

さすが相棒！（前書き）

その場所には独特の空気が流れています。あなた、関係注意ですよ！

さすが相棒！

ふいにレインがカインの鼻を指ではじいた。もちろんかなり加減して。

「てっ！ 何か久々だな、これも」

鼻をおさえて笑う。

“お兄さん”のレインからバカなことを言うカインへのお仕置きだった。

「確かにレインさんは、ある種の生き甲斐を感じていた頃があったけど……今はもう“それ”を望んではない。それに背負ってるって言っても今は何も苦痛に感じないからね」

それを聞いたカインが、しゃがんだままで遠くに目をやり片手で髪をかきあげた。

（生き甲斐か……）

『こんな姿になった自分たちが生きていると言えるのか、命があると言えるのか』

レインがまだ違う名で呼ばれていた頃に、カインはよくそんな疑問をぶつけていた。“死”を経験したことで自分は“生きていた”のだ、という答えが出たが、それも再生したからこそその答えであって正解かどうかまではわからなかったのだ。

人間だった頃の話ではなく「じゃあ今は？」と聞きたい反面、カイン自身それに答えられない怖さから、結局何も言えずに黙ってしまった。

……

そんなカインを横目で見ていたレインが手を伸ばして真っ白でふわふわの髪をそつと引っぱった。二人とも座っているので視線はそう変わらない。

「カイン、この世で一番の不幸は何だと思う？」

真意がわからずレインの目の奥をのぞきこむ。

「えっ？」

カインも世界の仕組みを知ってはいるが、この世のすべてを理解しているレインには到底及ばない。それなのにあえてそんなことを聞いてきたことが信じられなかったのだ。

「……君が、それを、聞くのかい？　ちなみにその質問に正解はあるのかな？」

「……」

そつとカインの髪にふれていた手が、いきなりその頭を鷲掴みにして乱暴にかき混ぜだした。

「うわっ！　ちよつとレイン！　何す……」

とつさに横を見たカインは、息を呑んだ。

レインの冷たく鋭い眼光がカインを射すくめていたのだ。

「もう……二度と俺にあんな思いさせるんじゃないぞ……カイン！」

「！」

ザワツと鳥肌がたつ。

レインは動けないカインをその場に残して身を翻すと屋上から落ちそうになっている二人を救出しに向かった。

「ほーら、二人ともー、そのへんにしなさいな。いい子にしないと帰りは歩かせるよー……」

放心状態のカインはぼんやりその様子を眺めていた。レインの言葉と、目の前で繰り広げられている光景、自分がここにいる理由。そのすべてを答えとして受け取った。

胸に引つかかっていたありとあらゆるものすべてが一気に消えていく。

「了解したよ。レイン」

カインは大きく頼もしい背中に向けて最高の笑顔でつぶやいた。

始まる日々！（前書き）

今というものは絶えず変化しています。そして次の今をつくっていくのです。あなた、平常注意ですよ！

始まる日々！

「うっ！」

ソファーに寝転んでいるレインの顔目掛けて投げ飛ばされたシーナが降ってきた。

「このやろっ！ よくもー！ 待てー！」

「誰が待つかよ！ バーカ！」

ばったばったとお子様二人が部屋を走り回っている。横になったままのレインは鼻をさすって、何か壊さないか心配しながらそれを眺めている。

茶葉を蒸らす時間を計っていたカインが大きなため息をついた。

「やれやれ、静かなティータイムは夢のまた夢ってところだね。せっかくの紅茶に、ほこりが入ってしまうよ」

レディー・フランソワの飼い主が行方不明になったのを聞き“身内”が荷物を片付けに行った。不思議なことに、それ以来カインは本格的で素敵なティーセットで毎日のお茶を楽しめるようになったのだった。

カインは日が経つにつれ本来の自分を取り戻し、貴公子モード前回でマイペースな毎日を送っていた。

「あー、やっぱり僕はレインと二人で静かに暮らしたいな。子供がいるとどうも騒がしくていけないね」

「ああ、そうだねえ。あの頃みたいにレインさんとカイン、無敵の二人で……ぐえっ！」

シーナがレインのみぞおちに膝から着地した。

逃げ足の速いジャックはシーナがレインに向かって飛び上がったのと同時に部屋から消えていた。ケンカ両成敗でシーナが暴走したとしても怒られるときは、だいたい二人一緒だったからだ。

「こーらー聞こえたぞー！ レカイン！」

レインはシーナをひょいっと持ち上げて床に下ろした。何事もな

かったかのように。

「それ止めなさいな。変な呪文みたいでレインさんやだよ。カインも何か言ってよ」

「ノーコメント」

カインは黙って紅茶を注いでいる。

「だってー、まぎらわしいしー。ねえ、じゃあ名前変えたら？ レイン前にも名前変わったことあったでしょー？」

「！」

とたんにカインが手をすべらせてカップを落とした。

名前を変えた、ということはレインがカインを失ったときということだ。記憶に残っているとはいえ、そのことをわざわざ蒸し返す必要はない。

動揺しているカインは震える手で割れずにすんだ絨毯の上のカップを拾ってレインの様子をつかがう。この件に関してはレインもカインも当事者なのだ。

無邪気ゆえ！（前書き）

心の内は、本人にしかわからない事情を含んでいるものです。あなた、言動注意ですよ！

無邪気ゆえ！

だが、意外なことに落ち着いているレインは静かに話した。

「ねえシーナ。シーナはカインのこと忘れてたのにレインさんの名前が変わったことは覚えてるの？」

「うん、覚えてるよー。確か前の名前はねー……」

「！ えっ？」

これにはさすがにレインも驚いた。レインたちのようにリセットされた生き物は一度失われた名前を口にすることはできないのだ。人ではなくなった今、名前はひとつずしか存在せず、レインのように名前を変えた場合は前の名前が完全に消去されるようになっていた。

レインとカインはそろって口を開けたまま固まっている。

「えっとー………忘れちゃった！ てへっ」

思いつきり息を吐いて脱力する二人。

「それで正解だよシーナ。あまり僕らを驚かせないでくれ」

カインの一言に突っかかるシーナ。

「ちよつとー！ 後からきたくせに“僕ら”ってなーに？ 何でレインとセットみたいに言ってるのー？ いくら名前が似てるからってずーるーいー！」

レインが頬杖をつく。

「レインさんとカインのほうが長く一緒にいたんだから仕方ない……でっ！」

シーナの頭突きを口で受けたレインが黙る。大きくて強くて丈夫すぎるレインに容赦はないのだ。

「ねえ、また名前変えてよレイン。カインと似てない名前にしてー」

困り顔のレインが何か言う前にカインが勢いよく立ち上がった。

その勢いでテーブルの上のティーセットが、かちゃん！ と揺れる。
「ダメだよシーナ！ なんてことを言うんだ君は！ もう少しで熱

「いい紅茶を頭からかけてやるところだぞ！ レインは名前を変えたりしない！ それは大事な名前なんだ！」

「えー？ そうなのー？」

シーナがレインの顔を見た。

だがそれには答えずシーナの頭をなでながら笑顔を見せて立ち上がった。

「さてと、レインさん今日は何をしようかなー」

部屋の隅からそつとのぞいていたジャックが飛び込んできた。

「何しよっかな、ってレイン！ 俺様気付いたけど今日はまだ一人も集めてないんじゃないの？」

そこにいた全員の時が止まった。

……

絶妙な彼等！（前書き）

ごく自然にゆるやかに……。日常は、それと気付かぬほど穏やかな
ものなのです。あなた、進度注意ですよ！

絶妙な彼等！

「あれ？ そうだっけ？ レインさんうつかりー」

「だいたいこんなのんびりになったのも、カインが茶なんかゆつくり飲んでるからだぞ！ そもそも何でもみんなわざわざ何かを食おうとするんだ？ 俺様にはさっぱり理解できないね」

さっきまでシーナと喧嘩をしていた自分のことは棚に上げて、カインのせいと言わんばかりの言いぐさだ。

新しいカップに紅茶を注ぐカインが優しく頬笑む。

「まあ、僕が増えたおかげで慌てて行かなくてもよくなったってことだろ？ 天気もいいことだしジャックとシーナは先に行つてのんびりと仕事をしておいで」

みんなの様子を黙って眺めていたレインはそれを聞いて、またソファーに横になった。

「えー、何それ。カインは行かねーのかよー？」

「そうだぞー。私たちを追い出してレインと二人っきりになろうとしちゃずるいしー」

カインはカップを揺らしてダージリンの香りを楽しんでから口をつけ、じつくりと味わっている。

「ねえジャック、もし後から出発した僕がさ、先に出た君よりも遙かに多く人を集めてしまつたら君はどう思ふのかな？」

言い終わらないうちにジャックが突風のような勢いで部屋から消えた。

シーナはポカンとそれを見送る。

すぐにクローゼットを乱暴にしめる音とドアが閉まる音が聞こえてきた。

カインはテーブルの上のスコーンにジャムをのせながら静かに口を開く。

「ところでシーナ、僕の記憶が正しければ今日は確か“もふわーず

”特製みるきーワッフル、パイン＆マンゴースペシャルの発売日だよね。でも並ばないと買えないって噂だから早く誰が見つつけ……”
「いやあああああああ！」

次の瞬間にはシーナが消え、そのままの勢いでドアの閉まる音が聞こえた。

なんだかんだでシーナにスイーツの幸せを教えたのもカインだったのだ。

静かな部屋の中に取り残された静かな二人。

はむはむとスコーンを頬張るカイン。

部屋に立ちこめる紅茶とスコーンとアルコールの香り。ほわほわっとカップから立ち上るゆげ。窓から差し込むやわらかな光は、あたたかく部屋を照らしている。

指に付いたジャムをなめるカインが、いつもの場所から天井を見つめているレインに優しい眼差しを送った。

見たもの！（前書き）

秘めていたことを話すのは自分独りでは持ちきれなくなるからでしょうが、それとも……。あなた、心情注意ですよ！

見たもの！

「ねえレイン、無駄なことを聞いてもいいかな？」

「当然。レインさんたちには時間がたくさんあるんだから」

ジャックがどこかで見つけてきた壁時計が時を刻んでいる。一秒、一秒、また一秒、時間は過ぎては溶けて消えていく。

繰り返す終わりと始まりに向けて一秒、一秒、一秒……。

「この世界に終わりはあるんだろうか」

「あと何億年かすれば終わりがくるけど、それは次のサイクルの始まりでもある。だから少なくともレインさんは本当の終わりを見たことはないね」

カインが、すっかりぬるくなった紅茶のカップを揺らした。

「レインは外の世界を見たことがあるかい？」

ふつと鼻で笑って頬杖をつきカインを見つめる。

「この世界にはカインがいるし、もういいかなーって思って諦めたよ。って言ったらどうする？ これじゃ答えになってないかな？」

「うーん。どうだろう。でもレインが諦めなければ行けるのかな？」

レインは少し考えて言葉を探した。

「ねえカイン、想像してみて。目の前に自分で作った小さな箱庭があつて、その中には家があり川が流れて人形が住んでる。だけどその人形がいきなり暴れ出して家や川なんかを全部壊しちゃったらどうする？」

「そいつをつまみ出して壊れた場所を直す、かな」

ハッとしてレインの顔を見る。

「そうだねカイン。この世界はそうやってできているんだ。君も少しは知ってるよね」

「……」

「じゃあカイン、さらに想像して。その人形をつまみ出すためには君はどうしないといけないのかな？」

「箱庭に手を入れて……ここまで持つてくる……」

自分の手のひらを見つめたカインが泣きそうな顔になって首を横に振った。

「レイン！ 君は……！」

鋭い眼光、氷のような表情。そこにいるのは“レインさん”ではなかった。

「そう。俺は外に出て見たんだよ。外の世界つてやつを。そしてその箱庭の持ち主を破壊しようとして、失敗したんだ」

「そんな……それって！」

始まりの場所！（前書き）

消したくても消せないものもあります。あなた、過去注意ですよ！

始まりの場所！

レインはそれには答えないまま憎々しげに歯ぎしりをした。
(あの……クソ野郎どもめ！)

隊聖時三五六 ジック・キヤル共国（一〇六年前 外世界）

「なぜだ！ なぜおまえはこんなことをする！」

アレキサンダーは、兵士たちを端から端まで眺め、鼻で笑った。
わずかに生き残った兵士たちは仲間の血しぶきを浴びながらも銘々の武器を構え、なおも抵抗の構えを見せている。

「主の命まで奪うとは……貴様は……！」

派手な銃声が轟き、生々しい音と共に大地に染みが広がる。それを境に兵士たちの言葉はすべて途絶えてしまった。

「てめーらの主なんか知ったことか。どうせお前らと同じクズなんだからよ」

馬鹿にするように軽く息を吐いてから、緑の瞳は辺りを見回した。
足の下には皆だったものの残骸が積み重なっていて、時折乾いた音を立てながら形を変えていた。

（まだか……。まだ足りないのか？）アレキサンダーは弾を補充したアイデアとゾルゲをホルダーにしまい、苛ついた表情で舌打ちをした。

未だ爆破による砂ぼこりが舞う中で瓦礫の頂上を目指し、血なまぐさい風に長いマントをたなびかせる。

眼下に広がる景色は壊滅状態で、元の様子を想像することさえできなかった。この世界は、すでに大半がこの大男の手によって破壊され無事と呼べる場所はほんのわずかしかなかった。

ふいにアレキサンダーは両手を広げ天を仰ぎ、星の裏側まで届きそうな声で大地を震わせた。

「命を繰り返すのはもうたくさんだ！ 一体何時になれば終わりが

くるんだ！　これでも、ここまでやつてもまだ足りないというのか
！」

しばらくその姿勢のままで立つアレキサンダーは両手を広げたま
まで碎かんばかりに拳を握りしめた。

（一体いつになったら……！）

その瞬間。

爆風にも動じないアレキサンダーが一步引くほどの波動が起こり、
世界に闇が降り掛かってきた。

「……！」

空間が歪む中で何が起こったのかを悟ると、すぐに態勢を立て直
しその方向に向かってつづやいた。

「ほう？　ようやくお出ましか。遂に終わらせてくれるんだな！
本当に待ちくたびれたぞ」

アレキサンダーは遥か上空から現れた、とてつもない大きさの物
体を睨みつけ冷たい笑いを浮かべる。

天を覆うその影は真っ直ぐにアレキサンダーを目指し、そして有
無を言わずその姿を地上から消し去った。

思い知るもの！（前書き）

無力とは、どういう状態のことを言うのでしょうか。あなた、力量
注意ですよ！

思い知るもの！

（ここは……？）

目を開け、我に返ったアレキサンダーは天地が裏返るような奇妙な感覚から吐き気を覚えた。辺りは見渡す限り何も無い。端も見えない。ただ一面に妙な色をした平地が広がっていた。

何かに気付いたアレキサンダーは、さっとしゃがんで自分が立っている場所に手をふれてみた。

（……暖かい。つまりこれは！）

「おい！ 聞こえてんだろ！ 今俺が立っているのは“何処”なんだ？ 答えるよ！ 顔くらい見せたらどうなんだ！」

叫んでからハッと考え込んだ。（いや、その前に何だか知らない物に顔なんてあるのか……？）

それに合わせるようにいきなり“地面”が揺れてアレキサンダーが片膝をついた。その顔が屈辱で歪む。

『まったくかわいいもんだな！』

いきなり頭上から割れそうな音が降ってきた。耳をちぎられそうなひどい音だったがアレキサンダーはそれに耐えるように歯を食いしばり、立ち上がりながら上に向かって声を張り上げた。

「これはおもしろい！ 耳障りだが言葉が通じるとはな。あんたは何だ？ 世界を終わらせる力があるんだろ？」

爆発したような音と共にまた地面が揺れたが、今度はしっかりと立ったままで中空を睨みつけていた。

『おもしろいのはお前の方だろう。言葉が通じる？ 誰が教えた言葉だと思っている！ 自分の生みの親もわからないとはな。だからお前は……』

（生みの……親……。そういうことか！）

ふいに本物の爆音が鳴り響いた。アレキサンダーが飛び退いた場所から、おびただしい液体が溢れ出している。

アレキサンダーは頭上から聞こえる地鳴りに向かって罵り声をあげた。

「言いたいことはそれだけか？ 俺はお前とくだらない話をしにきたんじゃない。お前ごと世界を破壊するためにここにいるんだ！」

言っが早いか小型爆弾を立て続けに五発放った。

液体を飛び散らせながら地面が大きく揺らぎ、垂直に傾いた。

「うっ！」

足場を失い宙に放り出されたアレキサンダーは素早くブーツのホルダーからナイフを抜き、思いつきり地面だった場所に突き刺した。ナイフ一本で支えられたまま辺りを見回したアレキサンダーは、一瞬で事態を飲み込んだ。

(……ああ、やっぱり俺たちは……)

そしてここへ！（前書き）

投げ出して諦めるのは簡単ですね。そして楽ですね。あなた、自存
注意ですよ！

そして……へ！

言葉を失ったまま揺れていると、突風と共に地鳴りが近付いてきた。

創造主の吐息に体をなびかせたアレキサンダーは、ナイフを握る手に力を込め、空いた手で素早くゾルゲを抜き、風がきた方に向かって構える。

だが引き金を引く前に闇に包まれ、一瞬で上下が逆さまになってしまった。

「うわっ！」

アレキサンダーは、その動きから自分を包んでいる物が手に相当する部分だと気付いた。

（くそっ！ こんなチャンス逃してたまるか！全部は駄目でも、せめてこいつを……）

声の主は、そんなアレキサンダーを嘲笑っている。

『これは驚きだ。ここを見て、まだ暴れるだなんて本当に元気なやつだな』

足場はできたが、闇の向こうから聞こえてくる言葉に怒りを覚えたアレキサンダーは、自分に被害が及ぶのを承知で中粒子爆弾を使った。

その威力により闇に大穴が開き光が差し込む。そしてまた宙に投げ出された。

当然、逃げ場をなくした爆破の衝撃は自身の体も削り取っていたが、彼にとっては大した痛手ではない。

『こいつ！ まだそんなことを！』

割れそうな声は、落ちていくアレキサンダーをまたつかまえて、ぶらさげ揺さぶった。

「くっ！」

『なんてうるさいやつなんだ！ コレはとんでもない失敗作じゃな

いか！　こんなことになるなんてな！　始めからやり直しだ！』

「！」

（そんな……馬鹿な……！）

アレキサンダーは黙って揺さぶられながら見下ろしていた。自分がいた世界が消滅する瞬間を。

この世の物とは思えないほどの不快な音が響きわたる中、ただ見下ろしていたのだ。

「……」

『ああ、そうだ。こういうやつは……』

（！　何っ？）

いきなり放り投げられたアレキサンダーは、声も出せず真下の球体に向かって落ちていった。

スローモーションのように落ちながら、くるくると回り目に映るものを焼き付けていく。

宇宙、惑星、天地、空間すべてが丸ごとひとつの世界。それと同じタイプの物が外には無数に作られている。動き変化し生きているおもちゃとして。

それぞれの世界には持ち主がいて好き勝手に自分の箱庭を創造している。

アレキサンダーは自分たちが創られ、ただ配置されていただけのおもちゃにすぎない、ということを感じ知ったのだ。

目の端に、創りたての新しい駒を嬉しそうに眺める一人の創造主が映り、なぜかわかりきっていたことを改めて心の中でつぶやいた。

（ああ……そうか。この形は自分たちに似せて創ったってわけか）

すべてを悟ったとたんに空間が割れ、アレキサンダーはそのまま雪原に叩き付けられた。

その背に！（前書き）

何もかもさらけ出す＝愛情ではないのです。あなた、心得注意ですよ！

その背に！

(ちくしょう……！)

無言で過去を振り返っていたレインの手は、いつのまにか固く握りしめられ血が滴り落ちていく。

「レ、レインっ！」

小さく叫んだカインが、思わず駆け寄り血を拭った。

レインは、カインに構うことなく静かに重い口を開き始める。

「俺は持っていた力で抵抗したが、そいつの手を吹っ飛ばすのが精一杯だった。おかげで元いた世界は俺みたいなのを生みだす危険物として破壊され、代わりに落とされたのがここだったんだ。おそらくこの世界でリセットすればいいとでも思ったんだろう」

レインは自分が過去として持っているすべてを淡々と、そして簡潔に口にした。

「な……」

今、目の前にいるひとりの男が一体どれだけの物を背負って生きているのか、カインは考えるのも恐ろしかった。

「俺はすべての世界を破壊する気だったが前の失敗があるせいで奴らは俺をつかみ出さなくなったからな。おまけに世界を包む空間をどんどん広げて自力で辿り着けないようにしちゃった……っ！」

急にカインがレインに抱きついた。そのまま締め上げる。それはまるでレインの記憶をすべて破壊しようとしているかのように見えた。

「いつか……いつかそんな君の苦勞が報われるときはくるんだろうか」

泣くこともできないためカインは悔しさに唇を噛み締めた。

乾いた血の跡が残る大きな手は、ぽんぽんとその背中をたたく。その眼差しは柔らかく、お兄さんのレインがもどってきていた。

「ねえ、カインはどこまで覚えてる？」

首にカインを巻き付けたままでレインが優しく話しかける。

「僕の記憶は、君がレインじゃなかった頃からだけど、あまりに古い記憶はどうか……ちょっと曖昧かもしれないな」

カインが腕の力を緩めた。レインの次に強いたため本気を出せば首にヒビくらいは入ったかもしれない。

腕を放したカインは表情が戻ったレインを見て安心したのか、おとなしく横に並んで座る。

その耳に、聞こえるか聞こえないかくらいの声でレインがぼつりとつぶやいた。

「そうか……それはよかった」

雪原の出会い！前！（前書き）

すべてのことはつながっているのです。あなた、連鎖注意ですよ！

雪原の出会い！前！

一〇五年前 フィンランド大公国

「クズ人形が！ 俺をここに落としたお前らの神とやらを怨むんだな」

紅く染まった雪。元の形がわからなくなった肉片が敷き詰められている。

土地の形や呼び名は多少違えど、ここでも世界のあり方は変わらなかった。男は、ただひたすら目に付く者を片っ端から破壊し殺戮の限りを尽くしていた。ただ世界を消し去るためだけに。

そうして男は闇雲に土地を渡り、海を渡り、自分がいた世界と同じようにこの世界にも絶望と恐怖を広げていったのだ。

「あ？」

男は弾を補充しようとして残り少なくなっていることに気付いた。それでも各地で争いが起こっているため在庫に不自由することはなく、いくらでも猛威をふるうことができた。

たくさん土地を回っていれば男が持つ数多くの武器に適合するものもあり、時にはこの世界の物をそのまま利用した。それに材料さえ見つければ持っている知識と能力でいくらでも生み出すことができた。

（しかし、俺が手を下さなくても勝手に殺し合いをしてくれる場所が多くて助かったな）

すでに五つめの国にさしかかっていたが、どこの土地でも同じように殺し合いが行われていたのだ。

（結局ここだって失敗作じゃねーか。このままじゃつぶされるのも時間の問題だな）

丘を越えようとしていた男の前に突然、複数の兵士が飛び出し一斉に銃を構えた。

「手を上げる！」

雪の中に穴を掘って隠れていたのだ。

男は静かにマントの中でホルダーに手を伸ばす。

「ああ？ 誰に向かって口利いてやがる！ このクズ人形が！」

そして次の瞬間、すべての兵士は無残に吹き飛び跡形もなくなつた。

「けつ。ここも俺より先に殺し合いが始まつてたとはな」

男がつばを吐いたとき、さあっと地面が動き、まだあどけなさの残る少年が出てきた。

「！」

「すごいね。一瞬でみんなを消しちゃうなんて。あなたはとっても強いんだね……」

とっさに向けられた銃口の前で少年は笑っていた。涙を流しながら。

「……」

男はゾルゲの引き金から指を離した。

いつもなら相手が泣こうがわめこうが何の躊躇もなく蜂の巣にするとこらだ。男は自分が取った行動そのものに驚いた。そもそも泣く暇など与えないうちに殺してしまう、というのが正解だったが。

少年は男と同じ綺麗な緑色の瞳で真っ直ぐに見上げていた。

「あなたはこの国の人？」

男は迷った。まともに相手をするべきなのかさっさと殺すべきなのか……。

雪原の出会い！後！（前書き）

都合が良すぎることには、“運命”などという思い込みが共存しているものです。あなた、切望注意ですよ！

雪原の出会い！後！

大体違う世界からきている時点でこの質問の答えは出ている。

「いや」

男は低い声で、やっとそれだけ答えた。

「そう。じゃあよかったね」

「……」

（俺は勝手にここに送り込まただけで、よかったも何も……）

「よその人なら僕みたいに戦争に行かなくてすむんでしょ？」

少年の目からあふれ落ちた涙は、頬を凍りつかせていく。

「まったく手のかかる奴だな……伏せてろ」

「え？」

放り投げた手榴弾が地面に大穴をあけた。開けた場所なので雪崩の心配もなく、すぐに簡易雪避場ができあがった。

「入れ」

「あ、うん。ありがとう」

（礼なんか言うな！ ガキめ！）

「ちっ！」

男は自分が何をしているのかわからなくなっていた。

少年は男の風貌に臆することなく問いかける。

「ここじゃないってことはどこからきたの？」

話して通じる場所ではない。

「遠くだ」

「へえ。じゃあさ、僕のこと殺してよ」

「なっ……」

殺さないでくれと言われることはあっても、殺してくれと笑顔で言われたことなど初めてだった。もしこれで殺せば少年の言うことを聞き入れたことになる。こんな小さな子供の言いなりになったということだ。

男は苛立った。

「クソッ！ 何をバカなことを！」

すると少年がいきなり男の赤い髪を引っぱって目を見つめた。空いた手でヘルメットをはずす。

少年の髪も男と同じ赤色だった。

「僕もう嫌なんだよ。父さんも戦争に行ったつきり戻ってこない。

僕は人なんか殺したくないのに兵隊として駆り出されて……残った家族も殺された。でも僕は、僕は自殺することさえできないんだ！」

男は少年を見つめていると自分のミニチュアを見ているような錯覚に襲われた。

（何なんだこのガキは）

「お前は人を殺すのが嫌なのか、お前自身が嫌なのか、どっちなんだ？」

「両方」

少年は迷うことなく答えた。

「……そうか。じゃあ俺が代わりにやってやるう」

「えっ？ 何を？」

「代わりに殺してやる。だからお前は勝手に生きる」

そう言い残して男が穴からはい出した。

少年が慌てて後を追う。

「待つてよ！ どうして？ 何で僕を殺してくれないの？」

足を止めた男が振り返って冷たく言い放つ。

「お前が自分で言ったんじゃないか。自分を殺すことはできない、と」

「えっ……？」

マントをなびかせて男は立ち去った。

繋がる過去！前！（前書き）

人は変わり続け、時は流れ続ける。あなた、自然注意ですよ！

繋がる過去！前！

九十六年前　フィンランド大公国

「今さら、こんなものをもらったって父はもう……」

「そうは言ってもご遺族はあなただけですし生きるためにお金は必要でしょう。どうしても受け取りを拒否する、ということであれば寄付でもなさったらいいのではないかと」

「じゃあそうします！　僕はこんなもの受け取れません！」

「わかりました。では受け取りを拒否され寄付をする、ということ
でここにサインを」

「よう、坊や。ちょっと待ってくれ。お前に聞きたいことがあるんだ。っておい！　何さわってん……」

「あなたは、あんなに綺麗だった目と髪をどうしてなくしてしまったのですか？」

「何をいきなり……！　まさか、お前……俺のこと覚えてるのか？」

「そう言うあなただって僕を覚えているじゃないですか。一目でわかりましたよ。僕は少し大人になったつもりですが、あなたはあの時のままですからね」

「俺が覚えているのは特別だ。それにこうなったのは最近で、あの時よりは年を取ってるんだぞ。いや、そんなことよりお前に聞いた
いことがあるんだ」

「そうだ、僕もあなたの名前を聞きそびれたことがずっと心残りだ

「つたんです！　あなたの名前は何というのですか？」

「だから、俺のことよりお前に質問が」

「ああ、いけない。先に名乗るのが礼儀ですよ。僕はエミール・ライネ。さあ、あなたの名前も教えてください」

「ああ、もう！　何なんだよ。俺はスペンサーだ！　これでいいのか？」

「スペンサーは、ファーストネームですか？　それともサーネームですか？」

「まったくお前は！　本当にガキみたいだな。サーでもファーストでもない、ただのスペンサー！　俺は髪や目の色と一緒に他の名前をなくしちまったんだ！」

「そう……ですか。僕は本当にあなたの髪と目が好きだったのに」

「何を馬鹿な。お前も同じ色を持ってるじゃないか！」

「とんでもない！　特に目なんて心の清らかさを映しているような美しさで」

繋がる過去！後！（前書き）

人生の分かれ道というものは、思っているよりも、もっとずっと近くにあるものです。あなた、実存注意ですよ！

繋がる過去！後！

「おい、それは俺の目の話か？」

「はい、もちろん」

「あー、確かにお前の目は腐ってるな。仲間を粉々にした奴つかまえて何が清らかだ！ それともお前の頭の中が腐ってんのか？」

「嘘はついていません。僕はそう思ったからそう言っているだけです！ だってほら、今だってこんなに綺麗だ」

「なっ……！ 離せ！ 全く恥ずかしいやつだ！ 調子が狂っちゃまう」

「今も綺麗ですよ。いえ、今のほうがもっと綺麗かもしれませんね。そう、まるでこの世の悲しみをすべてひとりで背負っているかのような闇の瞳です」

「……」

「スペンサー、あのとき僕はあなたに救われました。おかげでこうして生きていられる。だから今度は僕があなたを助けましょう」

「バカも休み休み言えよ？ ガキが何言ってるんだ」

「ガキではありません！ 泣いていたあの頃の僕ではないのです！ もっと、ずっと強くなりました！」

「俺から見ればひよつ子だ」

「そうかもしれません。あなたは見るからに強そうだ。でも僕だって、あなたの背負う物を少しでも減らせるようにもっと強くなれます！」

「一生懸命なのはいいが、俺は本当に最強だからお前に助けをもらう必要がないんだよ」

「ではなぜそんなに辛そうに見えるのでしょうか？」

「……何？」

「あなたは、暗く深く辛く重くさみしくて苦しくて悲しい。そして誰より強く美しい」

「……」

「僕がその悲しみや辛さからあなたを解放できればいいのだけれど、どうすればいいのか……わからないのです」

「なんでお前が泣くんのだ！ これだから人間は嫌なんだよ。それはこの世界にあるシュウキョウというやつなんだろっ？」

「いいえ、これはあなたの涙です」

「わけのわからないことを言うのはもう止めてくれ」

「泣けないあなたの代わりに僕が涙を流しているだけです」

「勘弁してくれよ……お前は一体何者なんだ？」

「僕はあの時あなたに出会えたおかげで命をつないだ、ただのフィン人ですよ。だからスペンサー、今度は僕があなたを守れるくらいに強くなつて見せます」

「やめておけ。そんなことになつたらお前は世界を破壊できてしまふぞ」

「なるほど。それは大変ですね」

エミールは穏やかな天使の笑顔で本当に楽しそうに笑った。

流れゆく時間！（前書き）

幸福と不幸の条件は同じです。それを決めるのは自分自身なんですから。あなた、虚像注意ですよ！

流れゆく時間！

……

レインが静かに立ち上がり窓から外を眺めた。

「この世界に落とされたレインさんを救ったのはカイン、君だったんだけどね」

「えっ？ それってどういう……」

それには答えず静かに微笑む。

「んー、あの二人が暴走しないうちにそろそろレインさんたちも行ったほうがいいかなー」

大きく伸びをしたレインが余計に大きくなった。

「……そうだね」

カインは静かに頬笑んでカップを片付けに行った。

外を眺めたままのレインは、強くなりたいたしつこく言うカインに武術を教えていたことを思い出していた。

どんなに倒されても傷ついてもいくらでも立ち向かってくるカイン。確かに戦場で泣いていた頃とは違い、それなりに強くたくましくなっている。それでも、ひよっ子のどこにそんな力が隠れているのかとレインは不思議に思ったものだった。

（俺より強くなったらどうしよう、なんて本気で心配しちゃったかな……）

カインが戻ってきて部屋の入り口で待っている。

「さて、レイン。それじゃ僕らも行こうか」

振り返ったレインが歩きながら笑顔を見せた。

「そうだね。シーナも暴走していそうだし。カインがきてからあの子は余計手がかかるようになったよ」

クローゼットの中には真っ白と真っ黒の長い長いコートが一着ずつ残っている。

「シーナはレインに甘えてるんだよ。僕がレインを取っちゃったと

思ってるから余計にね」

大きく広げられた白いコートを優雅にまといながらカインが笑う。
「カインもジャックにずいぶん気に入られてるじゃないの。そうだ。
あの子は肩車をしてあげると喜ぶよ。レインさんほどはなくてもカ
インも十分背が高いからね」

頬笑みながら洗練された動きで真つ黒なコートに腕を通すレイン。
「ねえレイン、無駄なことを聞いてもいいかな？」

「ああ、もちろん」

ドアを開けて一歩先に踏み出すレインが振り返って優しい眼差し
を送っている。

その半歩後ろからカインが外に足を踏み出す。

「今、君は幸せかい？ レイン」

外は暖かく空は透き通っている。

二人の間にある時間が、ゆっくり、ゆっくりと流れていく。

一秒、一秒、また一秒……

「それは本当に無駄な質問だよ。カイン」

楽しそうに笑う二人。

レインとカインは、その瞬間を噛みしめながら並んで歩き、やが
て街の雑踏に溶け込んで消えていった。

最後のピース！（前書き）

誰かに見られているような感覚は本当に気のせいですか？
さあ、繋ぎあわせてください。あなたの世界のすべてを……

最後のピース！

『なんだ。お前すごいな。ずいぶんおとなしくなってるじゃないか』

『すごいじゃないだろ。お前がアレを勝手に俺の作品に放り込んだ時はどうなるかと思ったよ』

『何言ってるんだ。よそ見してるからだろ』

『ひどいやつだな。これでもかなり手をかけてるんだぞ』

『まあまあ。どうせそっちの世界も駒が暴走して秩序を失ってただろ？』

『ああ、だから新しいルールを与えてやったんだ。おかげで次のサイクルまで持ちそうだよ』

『そうか。すごいなお前は。こっちは全部壊したせいで一から作り直したからな』

『それも楽しみ、だろ？ まあ、同じ失敗は繰り返さないようにしろよ』

『本当そうだよな。もう馬鹿にされるのはごめんだ』

『そうか、あの騒ぎを見てた連中に未だに笑われてるもんな』

『そうなんだよ！ 創った物から攻撃された情けないやつってな』

『ああ、でもその手は思ったより早く出来上がったじゃないか』

『そりゃそうだ。手のひとつくらい何てことないさ』

『それもそうか。でも、もし手じゃなくて……を狙われてたらお前は消滅してたってことを忘れるなよ？』

『当たり前だ！ もう二度とアレをこっちに出したりするもんか。他の奴にも注意するよう言っとけよ』

『もう言ってるよ。当たり前だろ？』

『ところでお前、新しいルール創ったにしてもそんな簡単にアレが鎮まるのか？ 俺たちを破壊しようとした奴だぞ？』

『ああ……そんなの簡単だよ』

『簡単？ あの小ささであれだけ暴れたんだぞ？』

『はっ！ あんなの何てことないって自分で言っただんじやないか』

『それはそうだが、あんなことは初めてだろ？ やっぱり消しておくべきだったと思ってたんだがな』

『せっかく創ったんだから最大限に楽しまなきゃ駄目だろ？』

『って言ってもなあ。自分で創つって何だが手に余ってしまつて』

『情けない話だな。創り主のくせに』

『そうだけど……なあ、いいかげん教えてくれよ。一体何をしたんだ？』

『ああ、聞きたいか？』

『何度もそう言ってるだろ。今後の参考に、な』

『しょうがないな。本当に簡単なことだよ。アレにな、ちっぽけな駒をひとつ与えてやったんだ。たったそれだけのことさ』

『ああ……そういうことか……』

奴らは本当に単純で

扱いやすい、ただのオモチャだからな

終

最後のピース！（後書き）

終幕？

そんなものがこの世界に存在すると思っているんですか？

あなた…… 永続弄続注意ですよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8817q/>

狩れ！

2011年3月10日07時10分発行